

---

# バカとテストと召喚獣もう一人の観察処分者

サドマヨ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣もう一人の観察処分者

### 【Nコード】

N4412W

### 【作者名】

サドマヨ

### 【あらすじ】

最先端技術「試験召喚システム」を導入した試験校「文月学園」に一人の転校生がやってきた。そいつの名前は……將軍！？しかも転校生なのに観察処分者！？

吉井明久や坂本雄二、Fクラスの仲間達と共にクラスの設備を巡る戦争や騒動が始まる。

## プロローグ

文月学園

そこは最先端技術「試験召喚システム」を取り入れた試験校

その校舎に続く坂道を駆ける青髪の少年がいた

「なんて最悪な日なんだ。転校初日から遅刻をしてしまうとは……！」

既に閉ざされている門を物ともせず飛び越し、校舎に向かって走っていく

その少年に一人の男がドスのきいた声で呼び止める

「転校初日から遅刻とはいいご身分だな、將軍」

將軍と呼び止められた少年はその足を止め、威風堂々と立つ男に目を向ける

「この人、かなりデキる……！？」

男の迫力に気圧されながらも軽く頭を下げる

「でも仕方無いですよ？いきなりの転校だったし、編入試験の勉強続きで寝不足だし、来る途中でお爺さんに絡んでいた悪徳商人を成敗していたし」

「最後のはどう見てもおかしいだろ」

少年はポリポリと頭をかきながら「そうですか？」と返事をする

「まあ良い。右も左も分からん生徒を導くのも教師の務めだ。自己紹介が遅れたが、俺は生活指導の西村だ」

「生活指導……ですか。如何にもって感じがします」

生徒の殆どから鉄人と呼ばれる男、西村宗一は封筒を取り出し、少  
年に差し出す

宛名の欄には『將軍』と大きく書かれていた

「確かクラスはA〜Fまでありましたよね？」

「そうだ。まあお前の行くクラスは言わずもがなだが」

「すみません……バカ親が学費の計算を怠ったせいで」

將軍は落ち込み気味になりながら封筒を開き、中に入ってる紙を取  
り出す

そして自分のクラスを確認する

『將軍……Fクラス』

「覚悟してはいたけど、いざ確認すると心が痛い……」

「通えるだけマシだと思うが？学園長に直談判してなかったらお前はここにいない」

「そうっすね。それもありますけど、これまで付ける必要は無いんじゃないですか？」

将軍が紙を鉄人の前に掲げ、ある箇所を指差す

そこにはこう書かれていた

『将軍。上記の者を学費滞納の為、観察処分者として認定する』

## 主人公設定（前書き）

やっと小説を投稿できました…

## 主人公設定

名前：将軍 16歳

イメージCV：檜山修之

文月学園高等部2年Fクラスに編入する事になった少年

ある理由から将軍を自分の名前としている

趣味は武器を自作する事

身体能力も高く、常に懐に武器やら何やらを入れている（どうやって出し入れしてるかは企業秘密）

学力は学年首席に匹敵するが、「面白くないと言われるのは嫌だ」とたまにふざけた珍解答をする

吉井明久と同じ観察処分者

その理由は両親が学費の額を間違えて支払いを延滞していたから

召喚獣の装備は黒い鎧にノコギリ刃の剣、背中に背負った二本の銃剣

## 主人公設定（後書き）

主となる人物の設定を紹介しました。腕輪なんかは後で出します。

## 将軍Fクラスに入る(前書き)

いろいろ飛ばしがちな部分もありますが刺々しいコメントはご勘弁を…

## 將軍Fクラスに入る

問 以下の問いに答えなさい

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

「問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

将軍の答え

『合金の例……古代に伝わる伝説の合金オリハルコン』

教師のコメント

是非その合金があったら見てみたいものです。

將軍は今、自分がこれから所属するFクラスに向かっていた

「ここがFクラスか。想像以上に汚い場所だな」

取れかけているクラス札、ひび割れた窓、ボロボロになっている戸を見て思った事を口に出す將軍

まさかここまで酷いとは…と思いつつも諦めて戸を開けた

「すみません。少し遅れました」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

ズダンッ！とナイフが教壇に立っていた男の頬を掠めて黒板に刺さった

投げた犯人は

「おつといけない。ムカついたから反射的に投げてしまった」

將軍だった

「初対面の人間に何しやがる！？」

「貴様こそ初対面の人間にウジ虫呼ばわりとはどういう了見だ？」

頬から血を垂らしながら抗議する男に一步も引き下がらない將軍

今にも火花が飛び散りそうな光景だ

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ …… って何この状況？」

「俺はお前の後ろにいるそいつの事を言ったんだ」

「謝罪も無しか？幼稚園から出直してこい」

將軍と教壇に立っている男がメンチを斬り合う

遅れて入ってきた少年はこそこそと席に着く

そのすぐ後に中年の男とピンク色の髪を持つ女子生徒が入ってきた

「ふああああ、ねむっ……」

皆が自己紹介の最中、将軍は寝不足なせいで寝そうになっていた

14

だが寝たいと言いつ気持ちを押し殺して何とか自己紹介を聞いていく

「ありがとうございます姫路さん。それでは最後の君、自己紹介をお願いします」

イマイチ回らない頭で人物の整理をしていると自分の番が来た

呼ばれた将軍は立ち上がって教壇の前に移動する

「えー、俺は新入生は新入生だけど、今日からここに転校してきました。名前は 将軍だ」

自分の名前を伝えた瞬間、場の空気が凍り付いた

## 将軍はとっても危険な青少年

問 以下の意味を持つ諺を答えなさい。

『?得意なことでも失敗してしまう事』

『?悪い事があつた上に更に悪い事が起きる喩え』

## 姫路瑞希の答え

『?弘法も筆の誤り』

『?泣きつ面に蜂』

## 教師のコメント

正解です。他にも?なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、  
?なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがあります  
ね。

土屋康太の答え

『？弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『？泣きつ面蹴つたり』

将軍の答え

『？泣きつ面踏みつけたり』



「あの、それ……名前じゃなくてあだ名だと思っんですけど……」

手を挙げるピンク色の髪を持つ女子 姫路瑞希

將軍はそれに気付いて我に返る

「す、スマン！本当に將軍が俺の名前なんだ！ちゃんと理由もある  
！」

將軍は色々追求されるのを避ける為、自分の名前の真相を手っ取り  
早く話す事にした

「俺は子供の頃、テレビで放映してた時代劇に出てくる将軍に憧れて、遊びでその真似事をしていたら次第に友達から将軍と呼ばれる様になった」

「」「」「ほっほっ」「」

「そして俺の両親や近所の人も面白がって俺を将軍と呼び始めた」

「」「」「は……………?」「」

視線の痛さに將軍は本気で死にたいと思った

しかし挫ける事なく話を続ける

「十年もの間その名で呼ばれ続けた結果、俺は自分の本当の名前を忘れてしまった」

「 「 「 ..... 「 「 「 「

今度は憐れみの視線が將軍に突き刺さる



將軍は話し終わると早歩きで自席に戻る

そこへ隣の席にいる少年 吉井明久と後ろの頬を切られた少年 坂  
本雄二が話し掛けてきた

「辛い事言わせちゃってごめん」

「……お前、笑わないのか？こんなふざけた名前の人間を」

本名じゃない名前を気にする將軍

子供の頃みたいにからかわれるんじゃないかと思っていた

「親にも忘れられてたんじゃ笑えないよ」

「ああ。最初に聞いた時は明久並みに頭がイカれてるなと思ってたが、あんな過去があつたんじゃ仕方無いな」

ズダンッ！と投擲された模造刀が後ろの壁に突き刺さり、雄二の髪の毛が少しだけ切れた

「スマン。ついつつかり投げてしまった」

「うっかりってレベルじゃないだろ！？明らかに悪意を込めて投げてんじゃないか！」

躊躇いなく刃物を投げる将軍にビビるFクラスの面々

雄二は将軍の行動に激昂する

「違うぞ。悪意を込めてるんじゃない。殺意を込めて投げたんだ」

「余計に悪いわケッ!!！」

「將軍、今アレを制服の上着の中から出さなかった……?」

「気のせいだ」

その後、ボロいために教卓が壊れ、担任の福原先生が新しいものを取りに教室を出ていたり、明久と雄二が立ち上がって廊下に出たりしていた

將軍は一切気にする事なくまた机に突っ伏して寝ようとする

しばらくすると先生が新しいそれでもまだホロイ教卓を持って戻ってきた

同じようなタイミングで明久と雄二が教室に入ってくる

そして明久は席に着き、雄二はゆっくりと教壇に歩み寄る

「さっきも説明したが、俺はこのFクラスの代表だ。代表として皆に一つ聞きたい」

雄一の視線が教室内の各所に移る

カビ臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

備品を順番に眺めていきこう告げる

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい

が 不満は無いか？」

「「「大ありじゃあっ！」「」」

Fクラス生徒の魂の叫びが木霊し、寝ていた將軍はビックリして飛び起きた

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

次々と挙がる不満の声

雄二は自信に溢れた笑みを浮かべ

「これは代表としての提案だが  
試験召喚戦争を仕掛けようと思う」

FクラスはAクラスに試

戦争の引き金を引いた

## 二人の観察処分者

問 以下の英文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly  
y. 』

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「  
？  
」\*  
x  
「

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

将軍の答え

「(テスト用紙がビリビリに破けている)」

教師のコメント

何故あなただけテスト中にカッターを投げられていたんですか。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらない」

至る所から不満の声上がる

將軍はすっかり目が覚めてしまい、教壇に立っている雄二に視線を向ける

「そんな事はない。必ず勝てる。いや、勝たせてみせる」

「そこまで言うからには根拠があるんだろうな？」

「勿論だ。このクラスには試験召喚戦争で勝つ事の出来る要素が揃っている。それを今から説明してやる」

雄二は不敵な笑みを浮かべて壇上から皆を見下ろす

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

康太と呼ばれた男子は手と顔を左右に振り否定のポーズを取り、姫路瑞希はスカートと裾を押さえて遠ざかる

そして康太は顔についた畳の跡を隠しながら前に出る

「土屋康太。こいつがあの特徴的な、寡黙なる性職者だ」  
ムツウーニ

「……………！！（ブンブン）」

「ムッツリーニ？」

もちろん將軍は知らないが、ムッツリーニの名を聞いた男子生徒達がざわつく

「おい、吉井。ムッツリーニって男はそんなに有名なのか？」

「まあね。男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑の意味で有名なんだ」

「姿行動名前からしてただのスケベなんじゃないのか？」

「……………！(ブンブン)」

「違うよ将軍。ムッツリーニはただのスケベじゃない。ムッツリスケベなんだ」

「……………！(ブンブン)」

さらに否定するムッツリーニ

まあそんな事しても無駄だろうなとムッツリーニの名を認識

「姫路の事は説明する必要もないだろう。皆だっつてその力はよく知  
っている筈だ」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

姫路瑞希はAクラスに入れる程の学力を持っているのだが、振り分  
け試験当日に高熱を出してしまい途中退席

結果、Fクラスに振り分けられてしまったのだ

「そっだ。俺達には姫路さんがいるんだっつた」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

「ああ。彼女さえいれば何もいらないな」

將軍は予想以上にバカな声を上げるバカに頭を悩ませる

「木下秀吉だっている。当然俺も全力を尽くす」

秀吉は学力はさほど高くないが演劇部のホープ、双子の姉がいるとかで有名

雄二も小学生の頃は神童と呼ばれており、実質このクラスにはAクラスレベルが2人いる事になる

気が付けばクラス内の士気は上がっていた

「それに、吉井明久だっている」

そして一気に下がった

周りでは誰だよとか聞いた事ないぞ等の声上がる

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは観察処分者だ」

「……それってバカの代名詞じゃなかったっけ？」

クラスの誰かから致命的な台詞が

將軍も実は觀察処分者なため、自然と懐に手を入れて何かを取り出そうとしている

「ち、違つよっ！ちよっとお茶目な16歳に付けられる愛称で」

「そつだ。バカの代名詞だ。教師の雑用係をし、いてもいなくても戦力に影響がない雑魚だ」

雄二の言葉に將軍の何か切れ、明久が反論しようとしたと同時に懐に忍ばせてあった何かを投擲

投擲された何かは雄二の顔のすぐ横に刺さった

その何かとは                      明らかに懐に入るサイズじゃない大きさの斧  
だった

一瞬静まり返った直後に皆が將軍の方を見る

「先に言っといてやる。ムカつくから投げた」

「こんなバカでかい斧をどっから取り出した！？いやそれ以前に、俺は明久の事を言ったんだぞ！何でお前がキレる必要があるんだ！？」

將軍は投げようとした二本目をしまい、キレた訳を説明してやる事にした

「俺も観察処分者だからだ」

「ええええええーっ！？」「」

明久、雄二を始め、クラス内の誰もが驚いた

「ちょ、ちょっと待って將軍！君も觀察処分者なの！？」

「ああ。訳ありでな」

「私みたいに試験の途中で退席しちゃったんですか？」

「いや、そうじゃない。何つうか……あまり人に言いたくないんだよな。物凄く間抜けな理由だから」

「明久みたいにバカやらかしたのか」

ズドンズドンっ！ガスッ！

茶化した雄二の顔面右隣に二本目の斧、顔面左には銀の杭が刺さっていた

「……何なんだそれは？」

「次は目と鼻と耳と口を切断してやる」

「質問に答える！何処から斧やボーガンなんて物騒なモンを取り出した！？」

「俺の懐に入らない武器など存在しない！」

「断言するな！」

「落ち着いて將軍！今だけは雄二を殺すのを待ってあげて！」

「今だけじゃねえだろ！」

「スマンな吉井。どうも俺はあいつが生物的に大嫌いみたいだ」

「安心しろ。初対面だが俺もお前が嫌いだ」

將軍はフンツと息を吐きながらボーガン（連射式）を懐にしまう

そこへ明久が明久が恐る恐る話し掛ける

「それにしても……ボーンや斧なんてどうやって用意してるの？」

「大抵の武器は自分で作ってるんだ。裏ルートで武器を取り寄せて改造したり、オリジナルで作ったり。最近はDSや携帯を改造して情報端末や盗聴機も作ったりしている」

話を聞いたクラス内の男子がマールライオンみたいに口をアングリさせた

「それは置いといて、何で転校してきたばかりの君が観察処分者に

「？」

明久の言葉に将軍は顔を歪めてしまう

「……………どうしても言わなきゃダメか？」

「多分言わなかったら雄二があらぬ理由で決め付けるだろうから」

「はあ……………分かった。言うよ」

将軍は渋々、自分が観察処分者になっている理由を打ち明ける事にした

「ウチは両親が共働きでな。父さんが研究員、母さんがゲームプログラマーと言う家系で、海外で仕事をしているんだ」

「ふむふむ」

「ある日、母さんから電話がかかってきて、『ごめん。ゲームの開発費用が少し足りなかったから学費から抜いちゃった』って話をしている一方的に切りやがった」

「.....」

未だかつてない憐れみの視線の中、將軍の拳がプルプルと震える

「直ぐ様電話し直したら着信拒否された。父さんにも電話したら、見透かされてたかのように着信拒否された……………そこで学園長に頭を下げて直談判したら、『観察処分者になる代わりに学費の支払いを少し延ばす』と言う条件を出してくれてな。やむ無くその条件を飲んで俺は観察処分者になった、と言う訳だ」

話し終わった將軍の拳にはいつの間にか斧が握られていた

両親に対する殺意であろう

將軍はその溢れる殺意を何とか押さえ込んで自席に腰を下ろす

そして試召戦争のルールが書いてある紙を開く

一、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立ち会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。尚、総合科目勝負は学年主任の立ち会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は、該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の和がこれに当たる

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はトドメを刺されて戦死しない限りは、テストを受け直して点数を補充する事で何度でも回復可能である。

五、相手が召喚獣を喚び出したにも関わらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける

六、召喚可能範囲は、担当教師の周囲半径10メートル程度（個人差あり）。

七、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象となる。

八、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を

常に意識すること。

以上が試験召喚戦争のルールである

**戦争開始 Dクラス対Fクラス**

問 以下の問いに答えなさい

『光は波であって、( ) ( ) である』

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

将軍の答え

「全ての敵を消滅させる波動」

## 教師のコメント

怖い事を考えないでください。あと、どうして君の答案用紙がボロボロなんですか？

「観察処分者の召喚獣って、疲れや痛みが召喚者に返ってくるのか……」

試召戦争のルールと観察処分者の設定と役割を認識した將軍

ルールが記された紙を鞆に放り投げる

「物に触れる事が出来るのは便利だが、やっぱりめんどくさいな」

「そもそも言ってもらえんぞ將軍」

將軍に話し掛けてきたのは誰もが振り返る様な美少女  
美少年だった  
もとい、

「えっと確か……木下秀吉、だったな？」

將軍は何かクラスメイトの名前を覚えていたようだ

「で、どうしたんだ？」

「うむ。実はお主に用があったの」

「用？用って何だ？」

「用と言つのはワシの性別の事じゃ。こんなナリをしておるがワシは」

「性別？何を言ってるんだ？お前は男だろ」

「っ!？」

將軍の言葉に何故か驚く秀吉

將軍は頭に？マークを浮かべながら首を傾げる

「……………いつからじゃ？」

「え？」

「いつからワシが男じゃと知っておったのじゃ？」

「いつから？そんなもん最初に見た時から分かったつつうの。男子の制服着てるし、声だって低いし」

將軍は当たり前前のように言うが秀吉はワナワナと震えている

將軍が『何か怒らせる様な事を言ってしまったのか?』と思ったその瞬間

ヒシッ

秀吉が將軍にハグをしてきた

「えっ!?!? な、何やってんだ秀吉!?!?」

「お主だけじゃ！一目でワシを男と見抜いてくれたのは！ワシは嬉しいぞ！」

「いやいやいやちょっと待て！そんな事でいちいち抱き付くのかお前は！？嬉しいのは分かったから離れる（って何か髪から甘くて良い匂いがするからもう少しこのままでもいいよかな…）」

……………プツチーン

教室内の何かがブチ切れた

「ん？今何かがキレた様な音がああああっ！？」

突然將軍に向かって大量のシャーペンや定規、カッターが投げられた

將軍は秀吉を抱えながら間一髪で回避

「て、テメエら何の真似だ！あと吉井、貴様まで俺にこんな物を投げ付けるたあどついう了見だ！？」

「將軍、君だけは……君だけは僕の味方だと信じていたのに！」

「……………抹殺」

「転校生の分際で皆のアイドル、木下秀吉に抱き付くとは良い度胸じゃねえか！」

「逆だ逆！秀吉から抱き付いてきたから冤罪だ！」

「どつちにしてるつらやま　羨ましいんだよっ」「！」

「そこは言い直さないのか！？おい坂本、こいつらを何とかしろ！」

將軍は雄二に一応助けを求めてみるが、雄二はアイコンタクトでこ

う伝える

『散々俺に攻撃したバチが当たったから自分で何とかしろっ  
』

「ブチ殺すぞテムエ！」

「「「貴様が死ねええええええっ！！」」」

再び殺傷能力と恨み妬みが込められた文具が將軍に向かって放たれる

將軍は懐からヌンチャクを取り出してアクションスター並のヌンチャクさばきで攻撃を防ぐ

「この俺に武力行使が通用すると思うなよ！」

將軍が懐にヌンチャクをしまい、再びそこから武器を取り出そうとした所で先生が入ってくる

「皆さん。次はテストですので早く席に着いてください」

「」「」チッ」「」

カッターを投げた全員が舌打ちをしてから席に着く

將軍は内心ホツとしたのだが

これで終わる訳が無かった……

……

「だはあく、疲れた〜！」

ただ今將軍は疲労困憊となって卓袱台に突っ伏している

何故こうなったのかと言つと……

テストが始まる

始まると同時に將軍にカッターが投げられる

將軍が懐から出したナイフで防御

その後10分毎にカッターが飛んでくる

將軍の答案用紙がビリビリになる

……と言つた一連の行動が昼休みになるまで続いた

『投げてた奴等は後で剥製にしてやるっか……』

完全に殺意が剥き出しになっている心の声

「さて、Dクラスへの宣戦布告の使者と言う大役を決めたいが……  
明久と將軍で良いだろ」

何故か自分の名前が上げられた事に気付く

「ちょっと待った雄二。下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加える事はない。騙されたと思っ  
て行ってみろ」

言われるがまま明久は將軍と共にDクラスへ向かった

だが將軍は雄二の意図と先程カッターを投げていた奴らの反応に氣  
付いていた

「雄二が嘘をついてる？」

「ああ。このまま宣戦布告すれば十中八九リンチをくらう。奴らの  
反応を見てすぐに分かった」

「雄二の野郎……早速嘘ついてやがったのか畜生！」

意図が分かったとはいえ、このまま宣戦布告しなかったら試召戦争が始まらない

將軍は懐から2リットルサイズのコーラとコップを一つ取り出して  
明久に渡す

「將軍。君の懐にはいろんな物が入ってるんだね……？」

「さっき言ったろ。俺の懐に入らない物など存在しない」

「もしかして君は、ラエもののニュータイプ？」

「それだったら俺は今頃『地球破壊爆弾』でバカ共を消し炭にしている」

「それ自分も死んじゃうからね？」

でもその内殺りかねないかもしれない

だって平気で斧を取り出す人間だから

「ところでさ、コーラなんてどうするの？僕達は今から宣戦布告し

に行くんだよ？」

「そうだけど同じ学舎にいる人間だ。乾杯して和ませてから宣戦布告した方が怒りは少ない　はずだ」

「今の一瞬の間は何？」

「さて、着いたぞ」

「話を逸らされた！？」

2人はDクラスに到着し、将軍がドアを開ける

「失礼しまゝです」

まずは丁寧に挨拶

Dクラス生徒（主に女子から）の視線が集中

「誰だあいつ？」

「見た事ない顔だな」

「ひょっとして朝に聞いた転校生じゃないか？」

「ちょっとカッコいいかも」

「付き合ってください」

熱烈なラブコールをとりあえず受け流し、將軍はクラス代表が誰かを尋ねる

「このクラス代表は俺だが、何か用か？」

出てきたのはDクラス代表 平賀源二

將軍は懐からコップを取り出して彼に渡す

「あんたがDクラスの代表か。実は大事な話があつてここに来たんだ。まあ立ちながらで悪いが、とりあえずコーラでも」

「あ、どうもありがとう」

平賀源二のコップにコーラが注がれる

「ほい吉井、お前も」

「ありがとう將軍」

明久のコップにもコーラを注ぐ

「で、ラスト一杯は」

三つ目のコップにもコーラが注がれていき

「坂本雄二からの宣戦布告じゃあああああっ!!」

敵代表の顔にコーラをぶちまけた

「何してんの將軍んんっ！？穩便に宣戦布告するんじゃないの！？」

突然の恐慌的な行動に待ったをかける明久

しかし、將軍の行動は更にエスカレート

今度はペットボトルに入ってるコーラを平賀の頭上からぶちまける

「オラオラ、坂本雄二の宣戦布告が飲めねえのか？」

「やめてーっ！それ火に油注いでるだけだからーっ！」

「おかしいな。これで怒りの矛先が坂本に向くと思ってたのに」

79

「実行犯は君だから怒りの矛先がこっちに向くのは当然でしょ！？」

自分達の教室に戻った明久と將軍

明久はボロボロだが将軍は無傷……いや、制服に赤い何かが付着していた

「おい将軍。その赤いシミは何だ？」

「細かい事をいちいち気にするな、ハゲるぞ。つうかハゲろ」

「細かくねえしハゲろって何だ！」

雄二は何故将軍だけ無傷で赤い何かが付着しているのかを明久に聞いてみる

すると明久の顔から血の気が失せていく

「…………… R 1 8 映像が目から離れない……………」

相当グロい光景だったのかその場で塞ぎ込む明久

「将軍。まさかとは思つが、殺ってないよな？」

「殺ってない                    とは断言しないZ E                    」

「警察を呼べ！ここに殺人鬼がいる！」

「冗談だ。いくら俺でも一線を越えたりはしない（ドスン）」

將軍の懐から赤い液体が付着しているチェンソーが落ちた

落とした当人は慌ててチェンソーを拾い懐にしまう

「一線を越えたりはしない」

「明らかに隠しきれなかったぞ!？」

將軍はいろんな意味で侮れない人間である

そして明久達はミーティングの為屋上に移動

そこで昼飯を済ませる事になったのだが……

「吉井。それ何だ？」

「何って、塩と水」

「お前は将来探検家を目指しているのか？」

明久の貧乏状況に唾然とする將軍

將軍も武器や道具を自作したり裏ルートで取り寄せたりしているが  
ちゃんと残す分だけは残している

だが明久はゲームや漫画の為に食費を削っている

趣味は本当に金がかかってしまう物だ

「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

「あ？」

瑞希の優しい言葉に明久は耳を疑った

「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼でよければ」

瑞希と明久の様子を見て將軍は「何か羨ましいな」と呟く

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくる

なんて」

美波が面白くなさそうな雰囲気と言っ

「島田。そんな事言ったら失礼だろ。それなら皆で弁当を作ってくれば良いじゃないか」

將軍の言葉に皆が振り向く

「え？將軍、料理出来るの？」

「何だその疑いの眼差しは？」



## 戦争開始 Dクラス対Fクラス（後書き）

いよいよDクラス対Fクラスの試召戦争が始まります。頑張りますので応援よろしくお願いします

將軍はFクラスの隠し玉？

問 以下の問いに答えなさい。

「ベンゼンの化学式を書きなさい」

姫路瑞希の答え

「C6H6」

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

「ベン+ゼン=ベンゼン」

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

「B・E・N・Z・E・N」

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

将軍の答え

「ベンチャー企業愕然。略してベンゼン」

教師のコメント

君も職員室に来なさい。

とうとう始まったDクラスとの試召戦争

前線は秀吉率いる先攻部隊、中間辺りに明久と美波が率いる中堅部隊が配置されており、將軍は教室内で情報端末（改造したDS）を使い教師についての情報を整理していた

本人曰く、どうやって情報を入手したかはナ・イ・シヨらしい

「美人で才女な学年主任が高橋女史。採点が甘い世界史の田中先生。化学担当の五十嵐先生に布施先生。……婚期を逃して単位を盾に生

徒達に交際を迫るようになった数学の船越先生……ここはなるべく忘れよう」

將軍は教師情報の確認した後、続いて学園内の構図を見る

そこへクラスメイトの一人、須川が雄二に伝言

「吉井隊長からの伝言、『偽情報で教師を別の場所に誘導して欲しい』との事」

「そうか。確かさつき木内教諭が呼ばれていたから……船越教諭辺りに流すか。明久が体育館裏で待ってるだけでも言っておけば確実だ」

雄二の卑劣な言葉を聞いて將軍の頭に電球マークが浮かぶ

「その大役、俺に任せてくれないか？」

將軍は自ら偽情報を流す役目を名乗り出た

「俺なら誰にも気付かれずに放送室に行ける自信がある。使っておいて損は無い筈だ」

須川から了解を得て、將軍は気配を消しながら目的地の放送室に向かった

雄二は怪しいと睨んではいたが今更やめさせても、と教室に留まる

まあ気配を消さなくとも前線、中堅部隊のお陰でそれどころじゃない状態なんだが

ピンポンパンピンポーン

『数学担当の船越先生、船越先生。お知らせがあります。二年Fクラスの吉井明久が体育館裏で待ってるとの事で、生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

スピーカーから流れた情報を聞いた瞬間、雄二はゲラゲラと笑い始めた

しかし、その笑いは一瞬で止む事に……………

『つてのは俺のお茶目なジョークDEATH 本当は坂本雄二が「Fクラスでディープキスを教授して貰いたい」と伝えて欲しいと言われたのでお伝えします』

雄二の顔に幾つもの青筋が……………

『唇を綺麗にして是非とも向かってあげてください』

プツッ！

「將軍んんんんんんんんんんんっ！！」

校舎全体に響く雄二の声

何かが物凄い勢いで向かってくる音を察知して、雄二は窓から外へ

飛び出していった

「あの野郎おおおおっ！絶対にブチ殺して殺るっっっっっっっっっっ！！」

「坂本……アンタあ男だよ！」

「ああ。感動したよ。代表と言う立場でありながら、まさかクラス  
の為にそこまでやってくれるなんて！」

「雄二。君は今最高に輝いているよ！」

この朗報（笑）がFクラスの士気に拍車をかける

「皆！雄二の死を無駄にするな！絶対に勝って、勝利を雄二の墓に報告するんだ！」

「「「うおおおおおっ！」「」」

明久の檄でFクラスの士気が更に上昇

放送室を去った後の将軍は良い笑顔をしていた

「よおっ、明久」

「将軍！」

役目を終えた将軍が明久の所にやってきた

「どつだ様子は？」

「盛り上がった士気とは逆に前線部隊が減らされてるみたいだよ。  
秀吉を含む数人は回復試験を受けているから何とか手を打たないと  
……」

せつかく偽情報を流したのに、と將軍は少しばかり落胆

だが落ち込んではいられない

Dクラスの前線部隊がどんどん押し寄せてくる

「負けてたまるかぁっ！サモン！」

明久が叫んだ瞬間、足元に魔法陣が現れ、制服に木刀を持った明久の分身が姿を見せる

「Fクラス中堅部隊、吉井明久。貴公の相手をあがっ！」

突っ込んできた敵召喚獣の前に現れたので衝突してしまい、明久の肩に痛みが走る

將軍は思わず笑ってしまった

「この部隊長はバカだ！俺一人で充分だから、皆は残りを！」

「失礼な発言されてるな明久……」

「くたばれ吉井！」

倒れてる明久の召喚獣に襲い掛かる敵召喚獣

明久は低い姿勢のまま横っ飛びさせ、通過した敵の足を掬って転がした

そしてDクラスの背後を指差して叫ぶ

「ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！」

「なにいつ!?!」

「なぬっ!?!何処だ!?!」

フルネーム霧島翔子

Aクラスの代表にして学年首席の美少女

Dクラスだけでなく、その場にいた全員が振り返っている

将軍も例外ではない

「いない……あつ、陽動作戦か。ならもっと景気良くやらないとな」

将軍は明久の行動を察知して懐から手榴弾を取り出す

手榴弾………？

「しよ、將軍！？そんな物をどつする気だよ！」

「安心しろ。こいつはスモークグレネード。煙幕手榴弾だオラアアアアアアっ！」

安全ピンを引き抜かれた手榴弾は投げた直後に大量の煙を放出

「う、うわっ！何だ！？」

「前が見えない！」

「おっ、丁度良い。こいつも使うか」

更に將軍は懷から取り出した爆竹に火を点け投擲

爆発音が響き渡り戦闘の継続は困難になった

「將軍、君はなんて過激な事を……」

「これくらいやった方が攪乱出来るだろ？ほら、さっさと引き上げな」

將軍の活躍によって明久の部隊はひとまず窮地を逃れた

この時明久は、「將軍って ラえもんの悪人バージョン……」と恐怖しながら呟いた

やっと煙幕が晴れてDクラスがFクラス部隊の異変に気付く

「何だ、一人しかいないぞ？しかもさっき煙幕を出した転校生じゃ

ないか」

「卑怯な真似をしてくれるじゃないか！」

「でもワイルドで素敵」

「付き合ってください」

將軍を睨み付けるDクラスの前線部隊

一人しかいない状況でピンチな筈の將軍は不敵な笑みを浮かばせていた

「一度くらいは戦ってやらねえとな。自分の召喚獣がどんな姿か気になるし。肩慣らしには丁度いいぜ！サモン！」

キーワードを唱えた將軍の足元に魔法陣が出現し、召喚獣が展開される

黒い鎧を装着し、右手に持ったノコギリ刃の剣

更に二本の銃剣を背中に背負った將軍の分身

Fクラス 將軍

化学 341点

「「「なにいつ!?!」」」

將軍の点数を見て驚愕するDクラスの面々

「能ある鷹は爪隠すつてな。しかし武器を持つてる感覚まで伝わる  
とは、観察処分者つてスゲエな」

將軍は早速召喚獣を動かしてみる

「よっ、ほっ、はっ。結構簡単だな」

なんとあっという間にコツを掴んだ

一通り動かした後、眼前の敵に剣先を向ける

「最初は誰が来るんだ？」

余裕を見せた顔で挑発する將軍

「ひ、怯むな！相手はたった一人だ！取り囲んで討ち取れ！」

「やっぱり正面から来る奴はいないか」

將軍を取り囲むDクラスの前線部隊

「相手は所詮付け焼き刃、この人数なら勝てる！」

Dクラスの一人がそんな風に声をかける

將軍は一番最初に潰す敵に狙いを定め

「せいっ！（ザシユッ）」

「なっ!？」

將軍の分身は敵召喚獣の首を斬り落とした

「ガンガン行くぜーっ!！」

初召喚とは思えない動きで次々と敵召喚獣を斬り捨てていく將軍の  
召喚獣

「ば、バカな！」

「一瞬で全滅だと!？」

將軍の操作技術は敵の舌を巻かせた

「じゃあな。お陰で勝利への道が近付いてきたぜ」

颯爽と走り去る將軍の背には、うっとりと思われるD女子の視線が集中していた

「Dクラスの前線部隊を全滅させたの！？ たった一人で！？」

「えっ？ な、何だ？ そんなにダメな事なのか？」

教室に戻ってきた將軍が現状を報告すると明久を含むクラスメイト

全員が目を丸くする

扱い慣れてない筈なのに一人でDクラス前線部隊を壊滅

誰もが驚き称える功績である

「凄いよ將軍！これだけ痛手を負わせたなら、すぐに敵の本隊が出てくるかもしれないよ！」

「うむ。これ以上ない程頼もしい味方じゃの」

「このままなら敵本隊を落とせるぞ！」



FクラスのテンションはMAXになった

その最中、Dクラスの本隊が動いたと言う報告が耳に入る

「皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

Fクラスより実力が高いから個人同士の戦いに持ち込むDクラス

本隊の人間も分散してFクラスを潰しにかかっている

敵代表平賀源二の防備が薄くなるものの、將軍をぶつけるか数人で取り囲まない限りFクラスは勝つ事が出来ない

將軍は直ぐ様平賀源二に勝負を挑もうとするが近衛部隊に阻まれてしまう

明久に任せようと考えたが、当人も近衛部隊に邪魔されて動けない

「畜生！あと一歩だったのに！」

明久の悔しがる発言を余所に、平賀の後ろからコソコソとある人物が近付いてくる

將軍はアイコンタクトでそれを明久に教える

「姫路さん、後はよろしくね」

「は？」

「あ、あの………」

瑞希が申し訳なさそうに敵代表平賀源二の肩を叩き、現国勝負を申し込んだ

Fクラス 姫路瑞希

現代国語 339点

V  
S

Dクラス 平賀源二

現代国語 129点

「え？あ、あれ？」

「し、ごめんなさいっ」

た 瑞希の召喚獣の大剣は一撃でDクラス代表の召喚獣を真っ二つにし

**將軍を殺そうとしたら標本にされると思え！**

問 以下の問いに答えなさい。

「good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい」

姫路瑞希・將軍の答え

「good - better - best

bad - worse - worst」

123

教師のコメント

その通りです。將軍君は今回、真面目に答えてくれて嬉しいです。

吉井明久の答え

「good - gooder - goodest」

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は語尾に -erや -estをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

「bad - butter - bust」

教師のコメント

「悪い」「乳製品」「おっぱい」

Dクラス代表討ち死に

この報告にFクラスは勝利の雄叫び、Dクラスは悲鳴の大合唱

「スゲエよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「將軍万歳！」

「姫路さん愛しています！」

今日の戦争で活躍した將軍が誉め称えられている

將軍は照れながら頭をかき、皆と握手していく

「ありがとう將軍！君のお陰でDクラスに勝てたよ！」

「いやいや明久。皆の協力があつたからこそ勝てたんだ。戦争は個人で戦うものじゃない……皆で戦うものなんだ！」

將軍と握手を交わす明久

そこへ忘れられていたクラス代表の姿が……

「將軍」

「おっ。これはこれは代表の坂本雄二。喜んでくれ。俺達はDクラ  
スに見事勝利した」

「ああ。お前のお陰だな。握手させてくれ」

右手を伸ばす雄二（左手を後ろに隠しながら）

将軍は笑顔で握手を交わそうとした

ヒュンッ（雄二が何かを突き出そうとする）

ガシッ！（将軍が左手を掴む）

カラントツ（雄二が持っていた物を落とす）

「……………このペンチで何をするつもりだった？」

人斬りを彷彿させる将軍の目が雄二を睨む

雄二は目を閉じて優しく言い放つ

「お前の爪って、剥がしたくなる程綺麗だよな」

ボキボキボキボキボキボキッ！

「ぐおおおおおっ！一瞬で指の関節が全部外されたあああああ  
ああっ!？」

「さうて、どれで切断してやろうかな」

將軍は残った雄二の右手を捻りながらナイフ、日本刀、斧、鎌、改  
造チェーンソー（片手タイプ）を床に整列させていた

「よし。チェーンソーにするか」

「ま、待て將軍！そんな物で俺の指を切るつもりか!？」

「心配すんな。万が一ショック死しちまったらお前の内臓は有効活用してやる。肺も腎臓も心臓も2つあるから高く売れるぞ」

「心臓は一つしかねえぞ!？」

将軍がチェンソーのスイッチを入れ、チェンソーの凶刃が唸り声を上げる

流石にヤバいと察知した明久は将軍を説得

「落ち着いて将軍!せっかく勝利したのにクラス代表を殺しちゃまずいよ!ここは勘弁してあげて!」

「……………坂本雄二、詫びろ」

「す、すまなかつた……………」

不本意ながら謝罪した雄二

将軍は軽く舌打ちをした直後に雄二を解放した

「……………ブツブツ……………」

将軍が何かを呟いている

気になった明久と雄二は悟られないように耳を傾ける

「……………人体標本……………」

恐ろしい単語を呟いていた……………

「まさか姫路さんがFクラスにいるどころか、転校生まで高得点者だなんて……………信じられん」

ヨタヨタと歩み寄るDクラス代表平賀に、瑞希は申し訳なさとそうに謝る

騙し討ちっばいが勝負は勝負

負けてしまったDクラスに反論の余地はない

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

「いや、その必要はない」

雄二の言葉に周りがどよめく

「え？なんで？」

「Dクラスを奪う気は無いからだ」

明久は雄二の言ってる事がさっぱり分からなかった

「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもAクラスだ。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「それは俺達にはありがたいが、それでいいのか？」

「もちろん条件がある」

そうやって雄二はDクラスの窓の外に設置されているBクラスの室外機を指した

条件とはBクラスの室外機を壊してもらいたいとの事

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もある  
とは思うが、そう悪い取引じゃないだろう?」

「ちょっと待った」

取引の内容に将軍が待ったをかける

「何だ将軍。不満か?」

「不満とは言わねえ。ただ、負けた上に教師に目を付けられるのは  
少し気の毒過ぎる」

将軍の心優しい言葉にDクラスから感謝の視線が殺到した（主に女  
子から）

「ならお前が何とかするのか？」

「ああするとも。ちょっと待っててくれ」

そう言っつて將軍は懷を漁り始めた

スタンガン、日本刀、斧、鎌、チェーンソー、煙幕手榴弾、ボーガン（連射式）、2リットルサイズのオレンジジュースに大量のお菓子とゴロゴロ出てくる

「明久。ドサクサに紛れてジュースとお菓子を拾うな」

「雄二。貴重なカロリー摂取の為には仕方無い事なんだよ？」

「窃盗は仕方無い程度じゃ済まないだろ」

「あれ？おかしいな。確かこの中にあるはず……………お、あったあつた」

やっと目的の物体を探し当てた將軍

手に持っていたのは小型の機械らしき物だ

「何だそれは？」

「特殊な電磁波を発生させて機械を狂わせる装置だ。こいつを取り付けてリモコンのボタンを押せば室外機は動かなくなる」

將軍は窓の外に出て、Bクラスの室外機に装置を取り付けた

一仕事終えた彼は床に散らばった日本刀やら何やらを拾い集め懐にしまった

「これではスイッチを入れれば良いだけだから、必要な時に言うてくれ」

「それは良いが、一つだけ聞かせてくれ」

「何だ？」

「それ……どうやってしまったんだ……？」

「企業秘密」

分からない謎が一つ増えたまま、今日は解散となった

將軍を殺そうとしたら標本にされると思え！（後書き）

將軍と姫路瑞希の活躍で見事Dクラスに勝利しました！次回はちょっと危ない話の予定です。

集団で襲うのは最低の極みだ！

Dクラスに勝利し、将軍は意気揚々と自宅に帰ってきた

「ただいま〜って言っても誰も居ないのは当然だよな」

父親が研究員であるから研究所に缶詰、母親はゲームプログラマー  
故に下見やら何やらで世界中を回っているから将軍は一人暮らしを  
している

しかも毎月千万<sup>ピ</sup>たる仕送りが口座に振り込まれてくるので生活には  
困らないし、武器も自作できる

「さてと、今日の晩飯は何にしようか？」

腹が減った將軍は食事を作るため冷蔵庫の扉を開ける

中に入っていたのは

瓶に詰められた塩

袋に入ってる砂糖

ケチャップとマヨネーズ（一本の半分ずつ）

唐辛子数百本（笑）

2リットルサイズのお茶

プリン一個

「調味料とプリンしか無いだと……！！いや、何で唐辛子だけ大量にあるんだ！？そもそも十日分買った筈なのに唐辛子だけって……！？」

冷蔵庫の中の現状に落胆していると、一枚の紙が目に入る

それを手に取り見てみると……

『將軍へ。お腹が空いたから冷蔵庫の中の食料を拝借しちゃいました。代わりに私の大好きな唐辛子を入れておきます。何か困った事があつたら連絡してね？キャハッ』

暫しの沈黙後、手紙をゴミ箱にダンクしてから携帯を取り出し電話を掛ける（非通知設定で）

その相手は將軍の母親

『（プルルルルル…ガチャッ）はい。どちら様ですか？』

「……………キサマヲブチ殺ス」

ピッー！

母親が慌てたのを確認してから電話を切る

多少の気晴らしにはなったようだ

將軍はとりあえずテーブルに座り、ラスト一個のプリンを食べる

「……………はあ。買い物行ってこよ」

「ねえねえ聞いた優子？今日Fクラスが2つ上のDクラスに勝ったんだって」

「聞いたわ。下位クラスだからって油断するから負けるのよ」

夜道を歩く2人の女子生徒

一人はAクラス所属で秀吉の双子の姉である木下優子

秀吉と瓜二つの容姿なので知り合いですら間違っ程似ている

もう一人は彼女と同じAクラスの工藤愛子

ショートカットでボーイッシュな雰囲気的女子だ

最下層のFクラスがDクラスに勝ったと言う話をしながら帰路を共にしていた

「何でも転校生が活躍したらしいよ？確か名前は……將軍って言うてた」

「……………何それ。いつの時代の人？」

Fクラスが勝てたのは姫路瑞希と將軍がいたから

その中でも將軍が話題の中心となっていたが、優子は名前を聞いてドン引きしてしまっ

「クラスの皆がそう言ってたから間違いないよ？」

「はあ………これだからFクラスは」

変人の溜まり場とも言われるFクラスに頭を悩ませる優子であった

「そうそう。これも聞いた話なんだけど、この辺り変質者が出るらしいよ？」

「変質者？」

愛子は近くに貼られているポスターを指す

そのポスターには「変質者出没注意！」と大きく書かれていた

用心しながら歩いてると、目の前の角から人影が……

チカチカと光る街灯がその人影を照らす

「「っ！？海老！？」」

何故か頭部が海老（恐らく被り物）となっている人間が2人に近付いていく

一目でヤバいと感じた2人は急いで引き返そうとした

「逃がさねえよ?」

後ろから男らしき声

だがそこにいたのはヒトデ（笑）、海月（笑）、蟹（笑）の被り物をした変人集団だった

「な、何……何なのよアンタ達は!？」

「答える必要もねえな」

海老（笑）が合図すると後ろの3人が2人の口を塞ぎ自由を奪う

「んーっ!んーっ!」

「よし。人目に付かない場所に行くぞ」

「マルミヤの〜マルは丸坊主のマル〜 マルミヤの〜ミヤは〜都落ちのミヤ〜 意味は特に無いけど〜何故かそう名付けた〜」

近くにあるスーパー「マルミヤ」で買い物を済ませた將軍は、店内で流れていた音楽「マルミヤソング」を歌いながら帰っている

母親に食料を横領されてしまったので費やした金額は二万を越えた

「唐辛子だけじゃ人間は生きていけねえって毎回言ってるのに全く理解してねえな。次にあいつから電話かかってきたら着信拒否してやる」

將軍の怒りはまだ治まっていなかった

因みに彼の母親はどうしようもない辛党で、白米やお菓子にもタバスコをかけるアホである

子供の頃、オヤツに出されたプリン（超激辛仕立て）を食べたら口から火を吹き、翌日には尻が大変な事になったらしい……

「母親なら息子の健康を考え……か……けて……！」ろっつうん？」

文句を言ってる途中で何か声が聞こえたような気がする

気のせいか?と思いつつ、神経を耳に集中させる

『誰か助けてーっ!』

「っ!悲鳴!?!」

その悲鳴は廃工場から聞こえてきた

將軍の現在地は普段滅多に人が通らない道なのだが、「マルミヤ」から帰る時はいつもこの道を使用している

將軍は両手に持っていた袋を電柱の側に置き、直ぐ様目の前の廃工場の中へ駆けていった

「嫌っ！やめて！」

「いくら叫んでも誰も来ねえよ。ここは廃工場だし、この近くを通る人間は滅多にいない。大人しくしてた方が怪我しないで済むぜ？」

リーダー格の海老が蟹に押さえられている優子の制服をビリビリに破っていく

その隣では愛子も海月とヒトデに制服を破かれている

「純白と黒か……なかなかそそるじゃねえか」

下着姿にされてしまった優子（純白）と愛子（黒）は体を隠す

「ボ、ボク達に何する気なの……?」

「ん? そうだな…… ストリップが嫌なら、イクまで俺のくすぐり地獄を受けてもらう」

「く、くすぐり地獄?」

「俺のくすぐりテクは半端じゃ済まねえぞ。以前の獲物は1分でイツたからな」

「「っ!?!」」

海老の変態的かつ驚異的な攻撃に2人は恐怖を感じ、ヒトデ、海月、

蟹は拍手喝采

指の関節を鳴らしてゆっくりと近付く海老

「誰か……誰か助けてーっ！」

「無駄だって言ってるんだろ？叫んだところで助けに来る奴は『ここにいるぞーっ』そう、ここにいる……って何っ！？誰だ！」

突然の声に魚介4人組はおろか、優子と愛子も辺りを見回す

魚介4人組の後ろに救いのヒーロー、将軍が立っていた

「……………今日の飯はシーフード炒飯だな」

海老、ヒトデ、海月、蟹の4人を見た将軍は呑気に晩飯の献立を即決した

将軍は目の前の現状を整理

『謎のシーフード変態軍団が同い年くらいで下着姿の女子2人を襲っている』と言う答えを一秒で叩き出した

「覚悟しろよ、シーフード軍団！」

「うるせえこのガキ！やっちまえ！」

ヒトデ、海月、蟹の3人がバットや警棒を持って將軍に殴りかかる

將軍はまずヒトデのバットをかわして左足の脛を本気で蹴る

「ほぎゃあああつぶー!？」

激痛で怯んだヒトデの顔面に拳を入れてバットを奪い、それを蟹に投げつける

まともにくらった蟹は動きが止まり、更にまわし蹴りで吹っ飛ばされる

後ろから襲い掛かろうとした海月も

「海月は九割が水分で出来ているぞキーーック!!!」

「(バキッ!)ぐあっ!」

どうでも良い知識が込められた蹴りで瞬殺され、残ったのは海老だけとなった

「す、凄い……………」

優子と愛子は見惚れていた（特に前者）

「さあて、残ったのはお前だけだ。海老炒飯がエビチリにしてやるから覚悟しろよ」

「ふん。俺はどっちも食う方が好みだ。それに……………」

バツ！（海老が着ていたジャケットを投げる）

バサッ（ジャケットで將軍の視界が真っ暗に）

ドガッ！（海老が強烈な前蹴りをくらわす）

「うわっ！」

將軍は咄嗟にガードしたがバランスを崩してしまい、海老の拳が顔面に打ち下ろされる

「相手が悪かったな。こう見えて俺は空手の都大会で優勝してんだ  
「よ」

「ぐっ……！海中生物が格闘技をたしなんでいたとは」

「元々人間だ」

口元の血を拭った將軍はお返しと言わんばかりにパンチを繰り返す  
が全てかわされる

「はっ。こんな遅いパンチ、欠伸しながらでも避けられっ!？」

海老の視界が手のひらで遮られる

將軍の目隠しフェイントが成功し、右拳が海老の顔面にヒット

直撃をくらった海老は尻餅をついてしまう

「……………ゲホッ、ゲホッ」

「大人しく魚屋に帰れ。もしくは警察に出頭しろ」

海老は將軍に悟られないよう腰に左手を忍ばせ、隠していたナイフに手をかける

「っ！危ない！」

「このクソガキがあー！！」

「「きゃあっ！」」

将軍がナイフで刺された光景に優子と愛子は目を閉じる

恐る恐る目を開いてみると…紙一重でかわし、自分の右腕でナイフを持った腕を挟む様に防いだ将軍の姿が

「高校生相手にナイフ使うのかアンタは？」

「調子に乗るなよクソガキが……大人をナメくさって、ただで済むと思うなよ……！」

海老の膝が將軍の腹に入り、ナイフを挟んでいた腕が緩んだ隙に引き抜く

「……もうキレた！謝っても許さねえ！」

再び刺そうと突進してくる海老

怒った將軍は懐から折り畳み式トンファーを取り出して海老の鳩尾にぶち込む

「しはあっ！」

海老の動きが止まったところで將軍はトンファーでメッタ打ち

ナイフを持った腕にも一撃加える

カランと落ちたナイフを遠くに蹴ってトンファーをしまっ

「吹き飛ばべ！海老フライパーンチ！！（ドゴッ！）」

「それ……普通のパンチじゃん……（ドサッ）」

こうしてシーフード軍団は一人残らずKOされた

「ふう。シーフードながら手強かった」

將軍はとりあえずそこら辺に落ちてた縄を集めてシーフード軍団を縛り、携帯で警察に電話する

「ねえねえ優子」

「な、なに？」

「あの人に惚れてたでしょ？」

「っ!？」

核心を突かれたのか物凄く焦る優子

だがその気持ちは正直で、彼女は將軍に一目惚れしてしまったのだ

「よしっ。これで良いだろう。」

(クルッ) 2人とも大丈夫

× ￥ 全

× < 〒 っ!？」

將軍はいきなり理解不能な言語を口に出してしまう

それもその筈、彼の眼前には下着姿となっている優子と愛子がいる

その姿を直視してしまった訳で……

「……？」

しかも2人は自分達の現状に気付いていない様子

將軍は顔を赤くしながら制服の上着とシャツを2人に差し出した

「そ、それ着とけよ。風邪引くといけないからな」

「えっ。あ、ありがとう……でも」

「もうすぐ警察が来るからあとよろしく！（ダッ！）」

警察が苦手な将軍は猛ダッシュで廃工場を去っていった

「やっぱり晩飯はシーフードリゾットにしようか」

集団で襲うのは最低の極みだ！（後書き）

見事にシーフード軍団を撃退した將軍でした！因みにシーフード軍団の元ネタは某カードゲーム漫画の主人公からです（謝罪）

**日本製殺戮兵器…その名はBENTOU!**

問 以下の問いに答えなさい。

「水」の化学反応式を書きなさい

姫路瑞希の答え

「 $2\text{H}_2 + \text{O}_2 = 2\text{H}_2\text{O}$ 」(これは卵焼きの原理)

教師のコメント

正解ですが卵焼きに化学反応式は使いません。

土屋康太の答え

「 $2\text{H}_2$  (2人が…) +  $\text{O}_2$  (お互いの…) =  $2\text{H}_2\text{O}$  (…ブシャアアアアアッ!)」

教師のコメント

解答用紙を血で汚さないでください。

吉井明久の答え

「酸素 + アレ = メタン」

教師のコメント

式になっていない上にアレとは何ですか？

将軍の答え

「シーフードスープが出来る」

教師のコメント

出来ません。

「おっ、明久。おはよう」

「おはよう將軍」

下駄箱で鉢合わせた明久と將軍

軽く挨拶をした後で自分の下駄箱を開けてみると、そこには手紙らしき物が何通かあった

「ん？何だこれ？手紙？」

手に取った手紙はピンク色や白にハート型のシールで封をされており、明らかに女子からの手紙だと推測できる代物だった

「……將軍。それは噂に聞くラブレターだね？」

「うおっ！何か明久から禍々しきオーラが！？」

嫉妬剥き出しで明久はラブレターを貰った將軍を睨んでいる

「やはり君は僕の敵なのか死ねええええええええええっ！！」

「危ねえ！？」

明久の恨み妬みが込められたハイキックをかわす將軍

「君はどこまで僕を惨めにすれば気が済むんだ！共に雄二の幸福を  
ブチ壊そうと誓った決意は嘘だったのか！」

「いや、そんな誓いはした事ないぞ！？てか、どうしてお前が血の  
涙を流さなきゃならないんだ！お前にいったい何があったんだ！？」

そこから將軍は明久から話を聞く事に成功した（攻撃をかわしながら）

Dクラスに勝利した日の放課後、教科書を取りに教室に戻ったらそこには瑞希がいて手紙の様な物を置こうとしていた

その現場を明久は目撃してしまい、Dクラスに勝利した後で雄二と  
楽しそうに会話をしている瑞希の様子を思い出し、そこから瑞希の

好きな相手は雄二だと確定

以来、心の底から雄二を羨ましいと思っていたのだ

「そんな事があったのか……」

「僕はもう、あの男を殺しても殺し足りない……!!」

「何でだろうな。同じ観察処分者であるせいか、俺も奴が憎たらし  
くなってきた。生物的にも嫌いだし、何かあったら俺も協力してや  
るよ」

「本当！？ありがとう將軍！君はやっぱり僕の味方なんだね！」

「昨日の敵は今日の友と言うように、共通の敵が出来れば問題ナッ  
シング！」

こうして明久は強力な味方を手に入れた

パシヤッ

「っ！誰だ！？」

將軍は妙な音がした方向を睨むが誰もいない

思い過ごしか？と疑問を抱きながら上靴を履く

「よし。そうと決まれば早速雄二に復讐する計画を」

「その必要はねえよ。今日は朝からテストだったよな？」

「え？そうだけど、それがどうかしたの？」

「一時間目は数学、そして監督の教師は船越先生。この意味が分かるか……？」

ニヤリと悪人みたいな笑顔で言った將軍

その言葉の意味を理解した明久

2人は最高の気分で教室に向かった

「將軍。テメエ後で覚えてやがれ」

「なんて卑怯な奴だ。近所のお兄さん（？）独身39歳を囿に使うとは」

昼休みになり、雄二と将軍は睨み合っていた

その原因は昨日の校内放送

監督の教師が船越先生だと知っていた雄二は事前に近所のお兄さん（？）を生け贄にしていた

「流石雄二だね。汚い策を使わせたら右に出る者はいない」

「ああ。人の事情を蹴り倒して弄ぶ最低な人種だ。お前の無念も分かるぞ。それよりも、流石に朝から連続でテストだと疲れる……」

「うむ。疲れたのう」

「……………（コクコク）」

いつの間にか近くに来ていた秀吉とムツツリーニ

休憩を挟んでも朝から昼休みまでテストだったので疲弊しているのは明久や将軍だけではなかった

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

ただ一人を除いては

「どついう構造してるんだろ？雄二の身体は」

「内臓だけじゃなく筋肉を売っても高値が付くな。まあいい、とりあえず昼飯だ」

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを」

「ちょっと待て」

学食に行こうとした明久を呼び止める將軍

そして懐から絶対に制服の中には入らないくらい巨大な重箱を取り出した

「それって、もしかしてお弁当？」

「その通り。昨日言っただろ？姫路の話聞いて俺も作ってくるって」

「は、はいっ。頑張っ作ってきました。迷惑じゃなかったらどう

ぞっ

瑞希が身体の後ろに隠していたバッグを出してきた

それを聞いて皆は断る筈もなく頂く事にした

教室で食うのは勿体ないので屋上へ移動

尚、雄二と美波は飲み物を買に行っている

瑞希はビニールシートを広げ重箱飲み物を蓋を取る

「」「」「」  
「おおっ！」「」

明久達は一斉に歓声を上げた

重箱の中には定番のオカズがギッシリ詰まっている

「それじゃ、雄二には悪いけど先に」

「いただきましたっ」

「……………(トヨイ)」

「あっ、ずるいぞ將軍、ムツッリーニっ」

將軍は唐揚げ、ムツッリーニはエビフライを掴まんで口に運ぶ

「ははっ。」「うづいづのは早い者勝負があああっ!?!?」

ボタン！×2

ガタガタガタガタ×2

突然2人が倒れて小刻みに震えだした

「わわっ、土屋君！？將軍君！？」

しばらくしてムツツリーニが起き上がり瑞希に向けて親指を立てる

凄く美味しいぞと伝えたいんだろう

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

喜ぶ瑞希だがムツツリー二の足に気付いていない

彼の足はガクガク震えている

「や、やめろ……！その赤いのを近付けるなあ……！」

その隣では白目を向いたまま何かを叫ぶ将軍が

ダメージはこっちの方が深刻らしい

「しよ、将軍。ほら起きなよ。食べて直ぐに寝るのは体に悪いよ？」

瑞希の弁当の破壊力を目の当たりにした明久はダラダラと汗を垂らしながら将軍を起こそうとする

「あ、父さんの作った薬だ。懐かしいな……よく爆発したっけ……」

「君はいつたい何の夢を見てるんだい!？」

本気でヤバいと察した明久と秀吉は將軍に心臓マッサージを施す

交代で行っていき、3巡目でようやく目を覚ました

「っ!?!何だ今は……!?!(姫路の弁当、ヤバすぎるだろ!?!)」

「目が覚めた?將軍(僕だっけ)って驚いてるよ!まさか姫路さんにこんな欠点があつたなんて)」

將軍と明久は瑞希に分からないようアイコンタクトで話し合う

そこへ飲み物を買ってきた雄二が卵焼きを素手で掴み

パクッ

バタン！ガシャガシャン！

ガタガタガタガタ

缶をぶちまけて倒れた

「さ、坂本！？ちょっとどうしたの！？」

先程の將軍、ムツツリーニ同様激しく震える雄二

すると目で訴えてきた

『毒を盛ったな……！？』

『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』

明久も目で返事をする

便利な技だ

その後、美波には「そこ、さっきまで虫の死骸があったよ」と言  
て退場してもらい、瑞希に悟られないよう必死で作戦会議

『明久！今度はお前が逝け！』

『無理だよ！僕だったらきつと死んじゃう！しかも何か字が違っ  
てた！』

『そこまで言うならテメエが逝けよ雄二。姫路の好意を無下にす

「気か？」

「いや、姫路は明久に食べて貰いたくて弁当を作ったのじゃと思うのじゃが」

「？どういう事だ秀吉？それじゃあまるで姫路が明久の事が好きみたいじゃねえか」

「みたいではなくその物じゃ。昨日明久に話しかけられただけで動揺しておったり、弁当を作ってくると言ったから容易に理解出来る筈なのじゃが？」

「寝てたから知らねー……」

明久の言葉を鵜呑みにしたのがバカみたいと思い、瑞希の意中の相手を改めて理解した

だが今は

「あ！姫路、アレは何だ！？（明久、雄二を押さえてる！）」

「えっ？何ですか？」

瑞希が明後日の方向を見ている隙に明久が雄二を羽交い締めにし、  
将軍が弁当（と言う名の殺戮兵器）をスケープゴートの口に押し込む

「もごああっ！？」

『へーイ雄二！ご飯はよく噛みましようネーっ！』

将軍は雄二の顎を掴んで無理矢理噛み砕かせる

「ふう。これでよし」

「やったね将軍」

「……お主ら、存外鬼畜じゃな」

秀吉の言葉と更に激しく震える雄二を無視する観察処分者達

華やかな筈のランチタイムは坂本雄二潰しの時間になってしまった

ジャンケンのチョコキは結構痛いっ

「もっつ。あんた達が全部食べるからお腹空いちやっただじゃない」

「いやあ、それはすまなかつたな（食わねえ方が正解だつっつの…  
！）」

瑞希の弁当は雄二を、そして後に出されたデザートは秀吉を瀕死に  
追いやり、ひとまず平穏な時間が訪れた

未だに2人の身体が震えている事を除けば

「まあ気を取り直して、今度は俺のをご賞味あれ」

將軍の懐から巨大な重箱登場

「本当にどうやって出し入れしてるんだろ？」

「うむ。もはや手品の域を越えておる」

「……………ラえもん」

「誰が ラえもんだ！」

「じゃあル ン三世？」

「ふざけた事言ってるよ弁当食わさねえぞコノヤロー」

包みを取り、蓋を開けて三段重ねになっている重箱を分けていく

その中身は瑞希の弁当と酷似していた

唯一違うのは二段目におにぎりがああるくらいだ

「……………何故だろう。寒気を感じるよ」

「心配すんな。味は保障する」

そう言って恐る恐るオカズを口に運ぶ明久

「ウマーーーーーイっ！」

そして歓喜の声を上げた

あとに続く様に皆がオカズを食べていく

「何だこの美味さは!?!」

「誠に美味しいぞ…!」

「……………プロレベル」

「ほ、本当に美味しいですっ!」

「嘘……………何か自信無くしそう……………」

相当美味かったのか、全員が將軍の料理の腕前に驚愕

特に明久はまともな食物を食べてなかった故に箸が止まらない

「そんなに美味しい美味しいと言われるとは思わなかった……………」

「ちょっと將軍！あんだどうしてこんなに料理が上手いのよ！」

「そうです、教えてください！」

頭を掻く將軍に血相を変えて詰め寄る瑞希と美波

女としての見せ場とも言われる料理で打ち負かされたから焦っているのだろう

將軍は一旦2人に離れてもらってから説明する事に

「昨日の朝話したから知つての通り、俺の父さんは研究員、母さんはゲームプログラマーだから仕事に付きつきりで家には殆ど帰ってこない。一人暮らししてる内に身に付いたんだ」

「そっぴや言つてたな」

「ちなみにどんなゲーム作つてるの？」

「え、言っちゃって良いのか？多分絶対ビックリする」

明久の質問に戸惑いを見せながら返事をする將軍

「もうこれ以上お前に関連する事で驚く物はないだろ」

「何か引っ掛かるような言いようだが分かった。言うよ」

將軍はコホンと咳払いしてから母親が開発したゲームを告げる

「OT」

「「何いっ！？」」

「ほらビックリした」

ゲームのタイトルを聞いた明久と雄二は揃って驚愕

更には秀吉とムッツリーニも目を見開いている

「それ本当!? FQって、あのFQ!?!」

「まさかあの有名なゲームを作ったのがお前の母親だったとは!」

「う、うむ。ワシでもやった事があるゲームじゃ」

「……………(コクコク)」

男性陣(?)は全員知っている様だが女性陣は分からない

FQとは「ファンタジアクエスト」の略称

高グラフィックの画像とアニメーション、オンラインに接続しての協力プレイシステムを使用しており、今世界中で注目を集めているゲーム

その人気から書籍化、アニメ化、グッズ化等もされている

毎月將軍の口座に（ピー）千万もの仕送りが振り込まれるのはこれが主な理由かもしれない

「まあこの話はまたいずれしてやるとして、雄二。今後のプランを聞かせて貰いたいんだが」

「良いだろう。次の相手はBクラスだ」

次のターゲットはBクラス

雄二の目標はAクラスなのにBクラスを相手にする理由が分からない

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

戦う前から降伏宣言

AクラスとFクラスでは次元が違いすぎるので無理もない

試験召喚戦争ではクラス代表を討ち取らない限り勝利は獲られない

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いや、そんな事はない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってる事が違っじゃないか」

「もしかして一騎討ちを仕掛けようってのか？」

唐突に出た將軍の言葉に雄二はそつだと頷き、作戦の説明を始める

「明久。試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるかしているな？」

「……えーっと」

「知らないのかよっ。設備のランクを一つ落とされる、だろ？」

明久の代わりに答える將軍

雄二は呆れながらも話を続ける

「つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ。では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「合ってるけど間違ってる！」

予想外のバカな返答に頭をはたく将軍

ここまでのバカは見た事無いぞと内心思った

「相手クラスと設備を入れ替えられるんだろ？」

「ああ。そのシステムを利用して交渉をする」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう。それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』と言った具合にな」

確かにいくらAクラスでも連戦はキツいだろう

しかし、これはBクラスを倒してからじゃないと成立しない

その上、瑞希や將軍の存在はDクラスに勝利した事で既に知られているから何らかの対策もあるはず

「とにかくBクラスをやるぞ。細かい事はその後で教えてやる。ついでに明久が將軍。今日のテストが終わったらBクラスに行つて宣言布告してこい」

「断る。雄二が行けば良いじゃないか」

「その通りだ。お前が行けよ」

当然明久と將軍は猛反発

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」

「ジャンケン？良いだろう。それなら乗ってやる」

雄二の提案に乗る將軍

ルールは至って単純

負けた方が宣戦布告に行くと言う物だ

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいいっつ」

「分かった。それなら俺はチヨキを出そう」

「そうか。それなら俺は  
ブチ殺す」

お前がチヨキを出さなかったら

「ちよっ……！何その心理戦!？」

「良い度胸だ。泣きっ面にしてやる」

「将軍了承しちゃった!？」

殴り合いでも始まるんじゃないかと言つ空氣が作られる

「行くぞ、最初はグー（ブスリ！）ぎゃあああああっ！目が、目があああああっ！」

「ジャンケンポンっ。はい俺の勝ち」

パー（雄二が目を押さえてる手）

チヨキ（將軍）

最初はグーの合図で雄二の両目を潰して勝利した將軍

目を潰せば自動的に手で押さえてくる

しかも、その手はパー以外では効果がない

将軍の見事な作戦勝ちだ

「テメエ汚ねえぞ！」

「汚い？ナニソレ、何処の国の言葉？」

明久は一瞬、クラス代表の座をいずれ乗っ取られるんじゃないかと思っ  
った

「くそっ！明久、次はテメエとジャンケンだ！」

「絶対嫌だ！て言うか雄二が負けたんだから潔く逝ってこい！」

「誰が行くかボケ！」

「分かった、分かった。俺だけで行くよ。どうせそこの雄二野郎は怖くて足がすくんでるだろうから」

「おいコラ誰がビビってるだど？それに人の名前を悪口みたいに言ってるじゃねえ！」

これぞまさしく犬猿の仲と言う物だ

「新参者の将軍に任せて大丈夫じゃろうか？Bクラスの代表は、あの根本らしいぞい」

「根本って、あの根本恭二？」

明久の返事をよそに、将軍はDS改造情報端末機を開いて人物検索

根本恭二と言う男はとにかく評判が悪い

「カンニングの常連」

「喧嘩に刃物はデフォルト装備」

「球技大会で相手チームに一服盛った」等、目的の為には手段を選ばないらしい

その情報を見た將軍は端末機をしまい、代わりにチェーンソー（改造片手タイプ）を取り出した

「ちよつ、將軍！？何でチェーンソーを取り出してるの！？」

「ハツハツハツハツハツハ。今日の午後は血の大雨洪水警報が発令じゃ〜……まずは根本を（ピー）して（ピー）にした後、こいつで（ピー）になった所を（ピー）」

自主規制音大活躍

将軍が若干………いや、かなりヤバい事になった

「ごめん将軍！」

「すまぬ」

「さっきのお返しだ」

ペチン！（明久のビンタ）

ペチン！（秀吉のビンタ）

ドスッ！（雄二のボディブロー）

3人の攻撃で正気に戻った將軍は首を振った後、現状を確認

自分の右手 チェーンソー

左手 いつの間にか書いた遺書（名前：根本恭二）

足元 クロロホルムの瓶（嗅いだ人を眠らせる薬品）

正気に戻った將軍はすぐに上記の物を懐にしまった

「危なかった。明久と秀吉が正気にしてくれなかったら、根本を（ピー）してたわ……」

「おいテメエ俺は無視か」

將軍は雄二にだけナイフを（投擲して）プレゼントしておく

「心配すんな。俺に攻撃してこようなら返り討ちに  
殺気！」

背後の殺気を気取った將軍は折り畳み式トンファーで飛んできた物を叩き落とす

叩き落としたのは分度器やコンパス等の文具（殺傷能力あり）

「誰だこんなもん投げやがったのは？」

ドバン！と豪快にドアが開かれる

「このブタ野郎！ブタの分際でお姉様とお昼を共にするなど、美春が即殺します！」

現れたのはオレンジ色の髪をし、両側を縦ロールに括った女子

將軍はナニアレ？的な目で明久に訴える

「將軍。君の情報端末機で調べて」

「説明を放棄されるとは。えーっと何々……」

名前……清水美春

所属……Dクラス

性格……島田美波が大好き、男が大嫌い

以上の情報を見て端末機を閉じる將軍

「お姉様！そんなにお腹が空いてるなら美春を食べてください！」

「何でよー!？」

「島田。その変態倒して良いか？」

「出来れば！」

將軍の言葉に美波は即了承

「な、何を言ってるんですかお姉様!？美春はお姉様の事が「うらめしや〜」……（ガシツ、ムニユツ）」「って離しなさい！ブタ臭いです！しかもどこを触ってるんですか!？」

將軍は素早い動きで美春の背後に回って（胸に当たってるけど）ガツチリ抱え込み

「くたばれっ！」

綺麗なスープレックスを決めた

「く……………そ……………っ」

地面に叩きつけられ、美春の意識がブラックアウト

將軍は「本当に変な奴らばっかりいるな……………」と実感した

「いたたた……今日は散々な目に遭いました。まあでも彼には一応感謝してますからよしとしてあげましょう」

その日の放課後、將軍のスープレックスを受けた美春が頭を擦りながら人気の無い場所に向かう

「如何ですか？一枚二百円でお売りしますが」

「「「「「買います！」「」「」「」

一斉に紙の様な商品を買う女子一同

その正体は

今朝の將軍の姿が写っている写真だった

ジャンケンのチヨキは結構痛いつ (後書き)

將軍の暴走劇がヤバかったかな……………？次回からはBクラス戦です！

## 放課後の暗躍

問 ( ) ( ) の中に入る語句を答えなさい

### 夏目漱石の作品

? 「我輩は ( ) ( ) である」

? 「 ( ) ( ) っちゃん」

### 姫路瑞希の答え

? 「我輩は (猫) である」

? 「 (坊) っちゃん」

### 教師のコメント

正解です。この2つは夏目漱石の代表作とも言える作品です。 姫路

さんには簡単過ぎましたか

土屋康太の答え

？「我輩は（我輩）である」

教師のコメント

まあ確かにそうですね

吉井明久の答え

？「我輩は（最強）である」

教師のコメント

君の答えはあらゆる意味で最強です

将軍の答え

？」「よっちゃん」

教師のコメント

先生もあの駄菓子が好きです

テスト直前の授業が終わった放課後

将軍はBクラス戦に向けて単独で校内の視察をしていた

情報端末機に記録したデータを見ただけでは些か不安だと思い、細心の注意を払っての行動である

「なるべく早く終わらせないと。確か正門が完全に閉鎖されるのは午後6時ジャスト。それまでに引き上げず鉄人に見つかったらヤバイ事になる……」

下校時刻を過ぎても残っているのは殆どが部活関連の生徒か補習を受けている生徒

関係の無い生徒が校舎に残っていると見回りをしている鉄人に見つかってしまう

更に捕まれば「チキチキ 朝まで鉄人とマンツーマン補習（と言っ名の拷問）」が発生してしまうので大半の生徒が恐れていた

「虎穴に入らずんば虎児を得ず」。リスクを冒してこそ対価となる情報が手に入るかもしれない」

この時の将軍は今ままで一番カッコいいと思う

しばらく歩き回っていると、明日の敵であるBクラスから話し声が聞こえてくる

「……で、Fクラスに勝てるのか？あのクラスには姫路瑞希や転校生がいるんだぞ」

「何の問題もない。作戦通りにやればこっちの勝利は確実だ」

将軍は気付かれないように教室の中の様子を伺う

「根本？もう一人の方もBクラスか」

何か有力な情報が手に入るかもしれないと思い、携帯電話（改造版）を取り出す將軍

そして内蔵されている録音機能を作動させた

「作戦って何だ？」

「まず10人くらいで廊下の様子見させる。その間に協定を結びたいと言って坂本を含めた教室に残っている奴らをここに呼び出す。午後4時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の午前9時に持ち越し、その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止すると言った感じでな」

「（ほう。端末機には卑怯者と載っていたのに対等な条件の協定を申し出ようとは、随分と優しいな）」

「無論協定なんて嘘だな」

「……前言撤回。奴は名前の通り根本から腐っている」

將軍は顔をしかめながら話の続きを聞く

「嘘なら何の為にそんな話を持ちかけるんだ？」

「奴らの教室が空になってる間に、机やシャーペンと言った勉強道具を壊す為だ」

その言葉が耳に入った瞬間、將軍の手は拳を固めていた

「い、良いのかそんな事して……？卓袱台とはいえ学園の設備だぞ……？」

「構わねえ。寧ろ奴らFクラスには勿体無さ過ぎる設備だ！あんなクズ共に机なんて物は必要無いんだよ！」

將軍の怒りメーターが50%を越えた

「その後はそうだな……Fクラスの島田を人質に取って牽制するんだ。数少ない女子を盾にすれば必ず攻められない」

怒りメーターが80%に到達

「だ、だが姫路瑞希や転校生はどうするんだ？Dクラス代表を討ち取ったのは姫路、転校生は前線部隊をあっという間に殲滅した。敵を減らしても、この2人が揃ってしまったら勝ち目なんて無い」

Bクラス生徒の正論に將軍の怒りメーターが45%に減少

だが心の中では名前くらい覚えといてくれと言っ切ない要望があった

「姫路に対しては問題ない。こいつを使う」

そう言って根本は封筒の様な物を取り出した

「？それは何なんだ？」

「姫路が昨日下駄箱に落としていった物だ。何なのかは知らないが、よほど大事な物ではある」

「確かに、綺麗に糊付けされてる辺り……誰かへのラブレターとも  
言えそうだ」

「（誰かへのラブレターだと？姫路が誰かに……まさか！）」

將軍はこれまでの事を振り返り結論を導き出す

明久が目撃した瑞希とその手紙

秀吉から聞いた「姫路は明久の事が好きかもしれない」と言う事実

將軍は断定した……あれは姫路が書いた明久へのラブレターだと

「今どきラブレターとはなかなか可愛いじゃないか。今ここで読んでもいいが、こいつをチラつかせて姫路を無力化させる。もしそれでも試召戦争に参加してこようなら、封を開けて大声で読んでやりゃあ良い」

下品な笑い声を背にして静かに立ち去る將軍

その顔は鬼神の如く

怒りメーターは臨界点を突破していた

「…………面白い事を企んでくれてるじゃねえか。根本恭二イ」

將軍から黒いオーラがにじみ出て宙をさまよい、窓ガラスに亀裂が入っていく

「根本恭二！貴様は完膚無きまでに叩き潰してやる！」

ヒビ割れゆく窓ガラスを気にする事もなく、將軍はある人物に電話をかけ、ある場所へと向かった

やって来たのは全生徒が恐れる唯一無二の場所

「鉄人の根城」

「悪夢の拷問部屋」

「坂本雄二と吉井明久がいなかったらここに来なさい」と言われて  
いる生活指導室

将軍は冷たい鉄のドアを開ける

「ん？どうした将軍。下校時刻はとっくに過ぎてるぞ。補習を受け  
たいのか？」

「西村先生、実は折り入ってお願いがあります」

「何だ」

「もう少しお待ちください。すぐに協力者が来てくれますから……」

将軍は怒りを隠しながら笑みを浮かべる

そこへ将軍が電話で呼び出した協力者がやって来た

「（ガチャッ）どうしたの将軍？大事な用事………オランウータン？」

「誰がオンラインウータンだ」

死亡発言をしてしまった明久は鉄人に頭蓋骨を締め上げられている

将軍が言った協力者とは明久の事であり、今後を考えて互いに携帯の番号を交換していたのだ

「西村先生、今はとりあえずOHANASHIをさせてください」

明久が解放されると同時に、先程の会話を録音した自身の携帯を取り出す

「将軍。校内に携帯を持ち込むのは校則違反だぞ」

「没収はこいつを聞いてからにしてください」

録音機能再生中

「「……………っ!?!?」」

オマケで再生中

「「……………っ!?!?」」

何がなんでも再生中

「……………（パキポキ）」

「……………（シャーツ、シャーツ）」

先程の会話を聞いた2人が取ってる行動

鉄人 指の関節を鳴らしながら補習について呟いている

明久 将軍が貸した日本刀を研いでいる

……………と言った様に完全に根本を殺す  
いや、倒す勢いである

「将軍。君はいろんな意味で頼りになる男だよ」

「サンキュー明久。それと先生」

「いや、正直あいつの行動には目に余る物があった。こうなれば補習どころか、俺直々の肉体的補習を施す必要があるみたいだな」

「肉体的補習って……それは名前からして封印した方が良くと思う……」

鉄人の肉体的補習

聞くだけで全身が震え上がりそうだ……

「それで將軍。頼みつて？」

「明久。これから俺が言う事、そして明日俺達だけで実行する事は間違いなく無謀だ。普通に話せば誰もがこの意見に反対する……………そして負ければBクラスだけでなく、Fクラス全員を敵に回し兼ねない計画だ。この多大なリスクを背負う覚悟はあるか？」

將軍が真剣な表情で言い放つ

誰もが反対する無謀な計画

もし負けたらクラスの皆から恨みを買ってしまっ……………

こんな話を聞いては普通なら協力なんて断固拒否する

だが明久の目に一切の迷いは無かった

「……………やってやろつじゃないか。その計画とリスク、僕も乗るよ」

「フツ、礼を言つぜ」

ガツチリと握手し合う2人

そして計画の一部始終を耳打ち

「……………本当にやる気なの？」

「さっき言つたろ、それ相応のリスクを背負つて。逃げるなら今の内だ……………お前がお前自身を許せるならな」

「許せる訳無いよ。後から後悔なんてのは無しだよ！」

「当たり前だ！と言う訳で西村先生。是非ご協力お願いします」

「ふむ、大した覚悟だ。良からう。特例だが許可してやる」

鉄のドアが重く閉ざされ、將軍と明久は計画の第一段階を夜遅くまで実行した

## 放課後の暗躍（後書き）

卑怯者根本の計画を知った將軍の秘策とは何なのか…？次回にご期待下さい！

無謀な賭けに乗る勇氣はあるか？

問 以下の問いに答えなさい

「女性は（ ）を迎える事で第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める」

姫路瑞希の答え

「初潮」

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

「明日」

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

「初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経と言う。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される」

教師のコメント

詳し過ぎです。

将軍の答え

「明後日」

教師のコメント

吉井君と一日違いで急ですね。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

午前中のテストを終えたFクラス

教壇に立った雄二は皆の方を向いている

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

「「「「「おおーっ！」「」」」」

一向に下がらないこのモチベーションはFクラスの武器と言っても過言ではない

將軍と明久も眠いのを我慢して殺る気を出す

「明久、ここまで来て今更逃げるなよ？」

「將軍こそ、言い出しっぺなんだからしっかり頼むよ」

一応周りに聞こえないよう最終確認を取る2人

昼休み終了のベルがBクラス戦開始の合図となった

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

「サー、イエッサー！」

Fクラスの大半分がほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した

「いたぞ、Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

正面からゆっくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる

数は約10人

「生かして帰す」「その戦争待った!!」……っ!？」

Bクラス生徒よりもデカイ声が廊下を支配し、その場にいる者全員  
の動きを止めた

「て、鉄人!？」

「何で鉄人が割り込んで来たんだ!？」

明久と将軍以外の人間は状況が理解出来てない

まだ誰も戦死などしていないのに「補習の鬼」鉄人が唐突に出現し、  
戦争をストップさせたからだ

「何か御用ですか西村先生？」

「高橋先生。この戦争は一時中断させてもらいます」

「「「はっ？」「」」

鉄人の言葉で更に混乱する生徒達

「詳しい事は体育館に移動してから話す。両クラス早急に集合する  
よし」

体育館に到着した両クラスと鉄人

両クラスの生徒はまだざわつきが治まらない

「いったい何なんですか西村先生？こんな場所に移動だなんて」

「根本。試召戦争に勝つ為とはいえ、少しばかり悪戯が過ぎたようだな」

鉄人の言葉に一瞬動揺する根本

將軍と明久はうんうんと頷き、その他の生徒は訳が分からない状態に

「な、何の事ですか？」

「まずはお前達にこれを聞いてもらおうか」

取り出したのは昨日没収した將軍の携帯電話

そう、これには録音機能が搭載されてる

その一部始終が再生された

「これでもまだ言い訳出来るか？」

根本の顔から汗が垂れ、反感の音が飛び交う（特にFクラスから）

「根本！貴様なんて卑怯な！」

「卓袱台すら必要ねえだど！？ふざけやがって！」

「しかも姫路さんの手紙を奪うとは許しがたき蛮行！万死に値する！」

Fクラスから罵倒、Bクラスから侮蔑の視線

今の根本はまさに四面楚歌

「根本。本来ならお前に1ヶ月の停学を宣告した後、俺直々の肉体的補習を施してやるところだが……」

「肉体的補習」の言葉に全員が震え上がる

「チャンスをくれてやる。將軍」

「はい」

呼ばれた將軍が一步前が出る

「根本恭二。これからここで試召戦争を行うが、団体戦じゃなく一

「騎討ちで勝負してもらつぜ」

「一騎討ち……だと？」

「実はこの会話は俺が録音してた代物だ。キツカケは偶然だったがな」

再びざわつき始めるクラス一同

「テメエの策が暴露されたんだ。不正行為で不戦敗にされるよりは一騎討ちで正々堂々とケリを着けた方が良いだろ？」

確かにこんな会話を聞かれたら代表としての発言力は皆無

一騎討ちで勝てば実力は証明され、誰も文句を言わなくなるだろう

「…………勝負の方法は？」

「三回勝負で試合形式はタッグマッチ。試合毎に科目を変更しての勝負だ。ただし、こっちは俺と明久だけで試合をする」

つまりBクラスの参加人数は6人

それに対しFクラス側は將軍と明久のみ

3試合をぶっ続けで行う事になる

「ちょっと待て」

そこへ雄二が怒りを孕んだ顔で抗議してきた

無理もあるまい

「何かご不満でも？」

「1つだけ言っておく。負けたらクラス全員で明久共々ブチ殺すぞ」

「その言葉……この無謀な賭けに乗ると解釈しても良いんだな？」

「待って將軍！殴られるのは覚悟してたけど、殺されるなら下りる  
ぐべっ！？」

逃げようとした明久の頸動脈を絞める將軍

覚悟したからには共に地獄へ行くしかない

「さあ、祭りの時間だ」

「……………（ピクピク）」

**無謀な賭けに乗る勇氣はあるか？（後書き）**

Bクラス6人vs將軍&amp;mp・明久の変則タッグマッチ

次の話で將軍の腕輪の能力を出す予定です

根本恭二ならぬ生け贄恭二！？（前書き）

アクセス数が一万に近付いてきました。純粹に嬉しいです。感想やご意見などありましたらどうぞお書きください。

**根本恭二ならぬ生け贄恭二!?**

問 以下の問いに答えなさい

「人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい」

姫路瑞希の答え

「? 脂質 ? 炭水化物 ? タンパク質 ? ビタミン ? ミネラル」

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね

吉井明久の答え

「? 砂糖 ? 塩 ? 水道水 ? 雨水 ? 湧き水」

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです

将軍の答え

「?人間は ?砂糖だけで ?最低 ?五日間は ?生き延びれる」

教師のコメント

そうですね

土屋康太の答え

「初潮年齢が十歳未満の時は早発月経と言う。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経と言い……」

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました

將軍の提案で成立したFクラスvsBクラスの一騎討ち

將軍は卑怯者根本をどの様に殺そ  
と額に指を当てながら考えていた

もとい罰を与えようか

「卑怯者には相応の罰が必要だ。爪に針を刺して蠟を垂らすか……？  
水責め、火責め、牛裂き刑……はたまた歯を麻酔無しで引っこ抜  
いてやるうか……」

將軍の頭の中には幾多の処刑術が走り回っている

そこへ卑怯者こと根本恭二が声をかける

「おい、將軍つて言ったか？お前ら2人だけで挑もうなんてやっばりFクラスはバカ揃いなんだな」

「うるさいぞ獲も  
根本恭二。それは俺達に勝ってから言う  
台詞だ」

「待て！どさくさ紛れに俺を獲物つて言おうとしなかったか！？」

「そんな失礼な事する訳無いだろ。一組目は誰が出るんだ獲物恭二  
？」

「今はつきり獲物つて聞こえたぞ！」

「空耳だ。仮にそう聞こえたとしても、お前には獲物の価値しかな

い  
「

「待ってよ將軍。それは間違ってる」

「どうした明久？」

「彼は獲物じゃなくて生け贄だよ！」

「もっと酷くなってるぞ!？」

「……………そうだな。奴は俺達Fクラスの生け贄になるから獲物じゃなかった」

「感心するな!」

「さあ、覚悟しとけよ生け贄恭二」

ギヤーギヤー喚く生け贄を無視して試合を始める將軍

一 試合目の科目は数学

Bクラスからは2人の女子のペアが出てきた

「最初はアンタ達か。宜しくな」

軽く挨拶する將軍だが、何故か相手側の2人は顔を赤くしてモジモジしている

「?どうした?具合でも悪いのか?」

「い、いえ……どうしよう真由美。やっぱり緊張しちゃっ……!」

「私だって同じよ律子!次はいつ会えるか分からないんだから今しか無いわ!」

何か只ならぬ様子のBクラス先鋒

將軍と明久は首を傾げる

「あの…私、Bクラスの岩下律子って言います」

「菊入真由美です」

「あっ、これはどいつもどい丁寧に。將軍です」

「えっと、1つだけ質問しても良いでしょうか？」

「なるべく手短なら」

將軍は何故か背中に刺さる視線と隣から感じる殺気が気になった

「て、手紙は読んでくれましたか？」

「え？手紙？……………っ？」

將軍は手紙と言つワードから過去の出来事を探索

「もしかして……俺の靴箱に入つてたアレ？」

「そうです！真由美も一緒に書きました！」

この瞬間、隣から殺気が凶器と共に伝わってくるのを予感した將軍は懐に手を伸ばし

「やっぱり君は裏切り者か死ねええええええっ！」

ち込んだ

明久の繰り出すカッターナイフをかわして首に針を打

「……………（ピクピク）」

「ふう。予感が当たったか」

「將軍……………お前明久に何をした？」

「気絶するツボに針を刺した。針を抜かない限り明久は起きない」

將軍の背中に殺気の視線を浴びせていた連中は今を見て恐怖を感じ踏み留まった

「すまない。諸事情によりこの試合は俺だけで相手させてくれないか？」

「あ、はい」

気絶した明久を放置、3人が召喚獣を展開して試合が始まる

岩下律子の召喚獣は中国服に巨大なハンマー（OVA参照）

菊入真由美は良質の鎧に金属棒と言った装備（こちらもOVA参照）

Bクラス 岩下律子 & 菊入真由美

数学 189点 & 151点

「流石はBクラス、まさに桁違いの強さだ。だが……俺も負けちゃいないぜ」

Fクラス 将軍& amp; 吉井明久

数学 389点& amp; UNKNOWN

「「「なにいつ!?!?」「」「」

将軍の点数にBクラス生徒は驚愕

将軍は得意気な目で根本を睨む

「悪いがこれも勝負なんだな。斬らせてもらっぜ」

將軍の召喚獣が劍の切っ先を相手に向ける

「いくわよ律子！」

「オツケー真由美！」

互いの名前を呼び合い、將軍の召喚獣を挟み込む様に動く敵召喚獣

「ほう、挟み撃ちか。無難な戦法だな。なら俺は真っ向から迎え撃つてやる」

將軍の召喚獣は背中 of 銃剣に持ち変えて両サイドの召喚獣に発砲

牽制程度の攻撃なので相手は大したダメージにはならず

「やあっ！」

岩下の召喚獣がハンマーを振り下ろしてくる

將軍は一步横に動かして避けさせる

「えいつ！」

今度は菊人の召喚獣が突っ込んできたので將軍はジャンプさせる

先程かわしたハンマーの上に綺麗に着地した將軍の分身

「そんな！攻撃が当たらない!？」

「召喚獣の操作は前回の試召戦争で慣れたんだ」

2人は次々と攻撃を繰り返すが、將軍は難なく回避

「さあて、そろそろいくか!」

ノコギリ刃の剣を握り締め、まずは菊入の召喚獣を一閃

その直後に銃剣で片足を撃って動きを止め、岩下の召喚獣を一刀両断

一試合目は将軍の圧倒的な力で快勝に治めた

根本恭二ならぬ生け贄恭二！？（後書き）

次回は將軍の腕輪の能力を出す予定です

## 続Bクラス戦（前書き）

アクセス数が一万を越えました！これからも応援お願いします！

## 続Bクラス戦

「い、岩下と菊人があつという間にやられた!？」

「將軍、噂以上に危険な奴だぞ！」

Bクラスに焦りの表情が浮かび上がる

將軍はFクラス全員に向かってVサインを見せる

「うつつ、負けちゃった……」

「ど、どうしたんだ？そんなに負けた事が悔しいのか？」

涙目の2人を見てオロオロする將軍

岩下と菊入は將軍の方を向いた

「この際ダメ元でも良い……將軍さん！」

「なっ、何すか？」

「本当は私達が勝つたら言おうと思ってたんですが、今ここで言います！噂を聞いて見かけた時に一目惚れしました！私と付き合ってくださいませんか！？」

「えっ！？？」

「律子！抜け駆けはダメって言ったじゃない！私だって將軍さんとお付き合いたいのに！」

なんと試召戦争の最中に告白されてしまった！

いきなりの事態に將軍はパニックってしまう

「ちょちょちょちょっと待った！俺とアンタ達は初対面だぞ！？こ  
ういう事は互いによく知り合ってから  
！？」

將軍の危険察知センサーがフル活動

背後には覆面集団が金属バットや木刀を構えていた

「おのれ將軍！我らの希望の星でありながら2人もの女子に告白されるだと！？皆これを許せるか！？」

「「「ゆる〜さ〜ん〜！」「」「」

「何だ！？何なんだこいつらは！？今までに感じた事のない邪悪なオーラを出してやがる！」

理不尽な怒りが頂点に達した時、彼らはFクラスの生徒から異端審問会FFF団となって異端者（主に女子と親しい奴）を処刑する

「諸君。ここは何処だ？」

「「「最期の審判を下す法廷だ！」」」

「異端者には？」

「「「死の鉄槌を！！！」」」

「男とは？」

「「「愛を捨て、哀に生きるもの！！！」」」

「宜しい。これより2・F異端審問会を開催する！」

「話を聞く気は皆無か……！やむを得ん！」

凶器を振りかざしながら襲撃してくるFFF団

將軍は懐から高圧洗浄機みたいな機械を取り出しスイッチを入れる

ブシャアアアアアアッ！

「ぶはっ！何だこの煙は！？」

「ギヤアーツ！目が、目が痛いーっ！」

「ぬがぁあっ！鼻が焼けるっっっっっっっ！」

将軍が噴霧したのは刺激物（唐辛子等）を配合した特製の催涙ガス

浴びた者は目・鼻・喉に激痛が走り、頭痛や吐き気などの症状を引き起こす

多量に吸い込めば呼吸困難になってしまう程危険なガスを、将軍は容赦なくFFF団全員の顔面に直射し続けた

「「「……っ……っ……っ！（ビクンビクン）「「「

将軍を殺そうとしたFFF団は激しい痙攣を起こしながら白目を向く羽目に

「あー、もう良いか？」

「あ、すみません西村先生。次の試合をお願いします」

この後催涙ガスは鉄人に没収されるかもしれないが、気にせず試合を続けていく

次の勝負科目は英語だ

「よし、そろそろ起こすか」

將軍は気絶している明久の首に刺さっている針を抜く

抜いた直後に明久は目を覚ました

「っ？あれ、將軍？何で僕倒れてるの？」

「寝てたの間違いだろ。早く次の試合の準備をしてくれ」

どつやら一時的に記憶も混乱しているみたいだ

將軍は気にする事なく、明久はモヤモヤしながらも召喚獣を展開

Fクラス 將軍 & amp · 明久

英語 415点& amp ;58点

VS

Bクラス 野中長男& amp ;工藤信二

英語 164点& amp ;158点

「おっ？これが噂に聞く腕輪か。なかなかカッコいいな」

「そういえば一定以上の点数を取った人の召喚獣は腕輪を装備して出てくるんだっけ。僕には全く縁の無い話だったからすっかり忘れてたよ」

一定以上の点数とは400点以上

そう簡単に取りれる点数では無いので味方なら頼もしい存在となるが、敵ならば厄介な脅威となる

「じゃあ早速使ってみるか」

將軍の召喚獣の腕輪が光を発し、直後に全身から無数の刺が隆起した

「「「  
.....」」」

その場にいた全員が何コレ？を具現化した表情になった

「もしかして、これで終わり？」

「人からハリネズミに退化したみたいなき感じて何か拍子抜けしちま  
う んっ？」

召喚獣がブルブル震え始める

將軍が何も無いのかと欠伸をした瞬間

ボシュウンツッ！！（刺が一斉に飛び散る）

ズドドドドツッ！（刺が敵召喚獣にクリティカルヒット）

2体の敵召喚獣は飛び道具と化した刺をまともにくらって消滅した

欠伸途中の將軍や明久、生徒だけでなく鉄人も今の光景に開いた口が塞がらなかった

「す、スゲ〜……………」

「なんて言っか……………これ一歩間違えたら大変な事になっちゃっよね……………?」

これをくらった時のフィードバックは計り知れない激痛だろうと言っ事に寒気が止まらない明久でした

「俺達、何も出来ずにやられた……………」

「俺達の方が生け贄みたいな気持ちになってきた……………」

実力を発揮する事なく無惨に負けたBクラス2人の背中には哀愁溢れる空気が漂っていた

## 続Bクラス戦（後書き）

將軍の腕輪の能力は結構悩みました……………一応名前は「針千本」と命名します。

根本恭二をブツ殺しちゃえ!?

試験召喚戦争FクラスvsBクラス

いよいよ最大のターゲット、根本恭二with男子が前に出てきた

「さて、いよいよ大詰めだな明久」

「うん。生け贄君が出てきたね」

「生け贄を名字みたいに使うな!」

ギャーギャー喚く根本

將軍と明久は軽く受け流す

因みに最後の勝負科目は日本史である

「サモン！」と召喚獣を呼び出す根本with男子

数珠で繋がれた二丁の鎌を持つ根本の召喚獣とオーソドックスな剣と鎧を装備した召喚獣が現れた

294

Bクラス 根本恭二 & 加西真一

日本史 208点 & 171点

代表だけあってやはり点数は他とは違う

「いくら将軍が高得点を持っていようが、パートナーがクズじゃあ勝ったも同然だな」

「ほう？本当にそう思ってるのか？」

根本のム力つく発言に明久の目付きが変わる

瑞希の純粹な気持ちを利用しようとした卑劣な奴をぶちのめすと言わんばかりに

「「サモン！」」

足元の魔法陣から将軍と明久の召喚獣が出てくる

「連続で試合をしてりゃあ流石に疲れが出ている。それに吉井の点数はゴミ同然。集中攻撃しちまえばあっという間に將軍は一人になる。結局お前らクズは勝てない」

Fクラス 將軍 & amp; 吉井明久

日本史 354点 & amp; 131点

「『なにいつ!?!』」

根本 with 加西だけでなく雄二達も明久の点数に驚く

振り分け試験時には50〜60点程度しか取れていなかった明久が倍以上の点数を取っている

「え！？吉井、アンタ何でこんなに点数が高いのよ！？」

「う、うむ。あれはもうCクラス並みの点数じゃ」

「おい將軍！何であのバカが100点オーバーの点数を取れてんだ！？カンニングさせたのか！？」

「少しは信用くらいしたらどうなんだ？昨日この科目だけを集中的に教え込んだんだよ。付け焼き刃にしては結構取れた方だ」

「嘘だ！バカでクズで最上級のゴミ虫、死んだところでどうでも良い様な明久が1日でこんな点数を取れる訳ねえだろ！」

「雄二、貴様あとでブツ殺してやる！」

酷すぎる罵倒が明久に飛び、將軍はもう放っておこうと根本with  
h加西の方に向き直す

「はっ！マグレで取れたからっていい気になるなよ！」

根本の召喚獣が鎌で斬らんと襲いかかる

明久は横に飛んで回避させ距離を取る

加西の召喚獣も剣で突き刺そうと突進してくるが、銃剣が放つ弾丸に妨害される

「確かに俺は連戦で疲れちゃいるが、明久だけを片付けたら良いってのは大間違いだ。それに……バカつてのは怒ったら一番怖い物だと言っ事を思い知れ」

明久の召喚獣は木刀で動きを止められた加西の召喚獣を殴る

眉間、首、大腿と言った人体のウィークポイントに攻撃を当て、点数を削り取っていく

「うわぁっ!」

「でりゃあっ!」

間髪入れない攻撃に加西の召喚獣はてんでこ舞い

將軍がアイコンタクトすると明久は無言で頷き、加西の召喚獣の背  
中を蹴る

將軍の召喚獣がノコギリ刃の剣を突きだし、敵の顔面を貫いた

「ば、バカな! 奴らはFクラスなんだぞ!? クズのくせに何でこん  
な」

「何度も何度もクズ、クズって………他の言葉を知らないの?」

「言っただけ無駄だ。こういうのは実感させてやんねえと」

二丁の銃剣を乱射する將軍の召喚獣に合わせて、明久の召喚獣が飛び出す

二丁の鎌が弾き飛ばされ丸腰になった生け贄召喚獣（笑）の喉を突く

「仕上げだ明久！」

將軍は自らの武器である剣を明久の召喚獣に投げ渡す

キヤツチさせた明久はすう〜と息を吸い込み

「人の気持ちを弄んだ報い、思い知れえええええっ！」

憎き生け贄を真つ二つに両断

FクラスvsBクラスの試験召喚戦争はFクラスの勝利で幕を閉じ

た

根本恭二をブツ殺しちゃえ!?(後書き)

遂に決着がついたBクラス戦。召喚獣にまで生け贄の称号を付けちやいました(笑)

ペナルティは屈辱まみれになる物を採用！

問 以下の問いに答えなさい。

「(1)  $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する  $X$  の値を一つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$ ?

の中から選びなさい。

?  $\sin A + \cos B$

?  $\sin A - \cos B$

?  $\sin A \cos B$

?  $\sin A \cos B + \cos A + \sin B$

姫路瑞希の答え

「(1)  $X = \pi/6$  (2) ?」

教師のコメント

そうですね。角度を「 $\pi/6$ 」ではなく「 $\pi/6$ 」で書いてありますし、完璧です

土屋康太の答え

「(1) X 〓 およそ3」

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちも分かりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません

将軍の答え

「(1)(2)めんどくささ」

教師のコメント

だからと言って解答欄に書かないでください

吉井明久の答え

「(2) およそ?」

## 教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを付ける生徒は君が初めてです

## Fクラス vs Bクラスの試験召喚戦争

Fクラスの勝利によって終局を迎え、互いが思い思いの反応

「う、嘘だろ……？ たった2人に負けた……？」

「Bクラスめ、ざまあみる！」

「將軍はやっぱり我らの希望の星だ！ すぐに胴上げの準備を！」

Fクラスの面々が將軍を（明久はついで）胴上げしようと走ってくるが、將軍は手のひらを向けて制止させる

「嬉しい気持ちは分かるが、まずやる事を先に済ませたいんだ。そうだろ雄二？」

「ああ、嬉し恥ずかしの戦後対談だ。な、負け組代表？」

さっきまで好き勝手ほざいていた根本は不貞腐れる様に座り込んでいる

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

「俺達Fクラスの目標はAクラス。ここは単なる通過点だからBクラスが条件を呑めば設備を見逃すってんだろ？」

その通りだと将軍に言葉を返す雄二

「……………条件は何だ」

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には好き勝手やられそうになったし、正直去年から目障りだったんだよな」

雄二の言葉は酷い言い方だが根本はそれだけの事をやってきた

周りにいるBクラスは誰もフォローしようとしな

「そこで特別チャンスだ。Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言してこい。そうすれば設備は見逃してやつても良い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけで良いのか？」

「ああ。お前がこいつを着て言う通りにするならな」

そう言つて将軍は懐から女子の制服を取り出し掲げる

瑞希の手紙は根本が持っているので制服を奪う必要がある

負け組代表に屈辱を味わわせ、目的の物も取り返す

一石二鳥のペナルティだ

「ば、馬鹿な事を言うな！この俺がそんなふざけた事を……！」

「Bクラス全員で必ず実行させよう！」

「任せて！必ずやらせるから！」

「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」

四面楚歌、現状の根本に味方などいない

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！」突撃隣の二ークラッシュュ！「変態ぐふうっ  
！」

抵抗しようとした根本に將軍がダッシュの膝蹴りを叩き込む

「とりあえず黙らせたぞ」

「お、おう。手際が良いな。じゃあ着付けに移ろうとするか。明久、  
將軍、任せたぞ」

「了解っ」

「おじよ」

ぐったりと倒れている根本の制服をひっぺがし、パンツ一丁にさせる  
明久と將軍

「うーん……これ、どうするんだろっ？」

「もう全部頭に被せたら良いんじゃないかね？」

「私がやってあげるよ」

着付けに手間取ってる2人にBクラス女子の1人が名乗り出てくれた

「そう？悪いね。それじゃあ折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台が腐ってるから」

酷い言われようだな根本は

「よし。俺も折角だから死上げを」

「っ？剃刀なんか取り出して何するの？」

「ペナルティは屈辱的な物にしてやりたいんだ。根本の脛毛を全部剃り落とす」

將軍は悪い顔をしながら根本の脛毛を剃り始めた

明久は合掌してから根本の制服を漁り、例の物を取り出しポケットに入れる

皆より先にFクラスに戻る明久

そしてそれを見て追い掛ける様に教室へ向かう瑞希

根本の脛毛処理を終えた將軍は後はBクラスに任せ退散

その後、女子の制服を着させられた根本は撮影会までペナルティに入れられ、一生忘れられない素晴らしい思い出（と書いてトラウマ）を負う事になった

とある場所にて

「最下層のFクラスがBクラスに勝利ね。ふうん、なかなか面白い事になってるじゃない。この分だとウチのクラスにも攻め込んで来るわね」

「かもしれない」

「それに、あそこには凧の花婿がいるからこっちとしても都合が良いわ」

「……………っ！か、からかわないでよ刹那！」

「あはははっ！ホントあんたって分かりやすいわね。顔を茹で蛸に

して」

「そ、そういう刹那だって……」

「あたし？まあ、違っつて言ったら嘘になるけど」

「うっ……………」

「何？何か心配事？悩むのは今じゃないでしょ。ここで悩んでたら後先も悩んでしまう。悩む前に動きなさいよ」

「（パンパンっ！）うん。頑張ろっ！」

ペナルティは屈辱まみれになる物を採用！（後書き）

終盤で出た2人はオリキャラです。詳しい事は後々に

## 対Aクラス戦の秘策（前書き）

まだ序盤なのにアクセス数が一万五千に達しそうです！やっぱりバカテスは凄いです……

## 対Aクラス戦の秘策

Bクラス戦が終了し、点数補給のテストも受けたFクラス　と  
言うより明久と将軍

戦ったのは2人だけなので然程時間を要する事もなかった

補給テストを終えた翌日、FクラスはAクラス戦に向けて最後のミ  
ーティングをしていた

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われてい  
たにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があって  
の事だ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

「ほう。明久を嵌めたり俺に敵意を持つてる人間にしちゃあ意外だな」

將軍は生物的に雄二が嫌いなのでまだ少ししか信用しきれてない

雄二は気にする事なく続ける

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないと言う現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

「おおーっ!」

「そうだーっ!」

「勉強だけじゃねえんだーっ!」

Fクラスの気持ちが1つとなった

將軍はその士気に圧倒されかけた

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着を付けたいと考えている」

教室中にざわめきが広がる

一騎討ちとはクラス間の戦争を代理で行うから代表同士の学力が純粋に勝敗を分ける

Aクラス代表とFクラス代表との学力はまさに雲泥の差だ

「やるのは当然、俺と翔子だ」

「馬鹿っぽいお前が勝てると思ってんのか？（チッ）」

明久より先に口が出てしまった將軍の頬をカッターが掠める

犯人は雄二だ

「次は耳だああああっ!？」

將軍発の首を狩ろうとした斧が黒板に刺さる

雄二はギリギリかわしたので被害は髪の毛だけで済んだ

「チツ、避けんなよ」

「避けるわボケ！」

凶器に関しては將軍の方が何枚も上手の様だ

「まあ、將軍の言う通り確かに翔子は強い。まともにはやりあえば勝ち目は無いかもしれない。だが、それはDクラス戦もBクラス戦もおなじだっただろう？俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

「カッター投げる暇があるならさっさと説明しろよ」

將軍の指摘に雄二は対Aクラスの秘策を説明し始める

「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

「小学生程度の問題だと満点が前提でミスしたら速攻負けになるじゃないか」

「だよな。同点だったらきつと延長戦になって問題のレベルも上げられちゃうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「おいおい、あまり俺をナメるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼りきったやり方を作戦などと言うものか」

「勿体ぶらずにお前の秘策とやらを教えるよ」

「分かってる。俺がこのやり方を提案した理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ。その問題は  
大化の改新」

雄二は誇らしげに言う

「大化の改新で小学生程度の問題。何年に起きたとか言う事か？」

「ビンゴ。その年号を問う問題が出たら俺達の勝ちだ」

年号を問う問題は基礎中の基礎

こんな簡単な問題を間違える人間は早々いない

『明久。お前は分かるよな？』

『え？当たり前じゃないか。僕ですら鳴くよ（794）ウグイス、大化の改新とスラスラ答えられるよ』

『残念。大化の改新が起きたのは645年だ……』

明久は將軍の視線から目を逸らした

「あの、坂本君」

「ん？何だ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

瑞希の言葉に明久は訝しげに雄二の方を見る

『どうしたんだ明久。まるで怨敵を睨む様な目付きになってるぞ？』

『雄二……！姫路さんに好かれているのみならず、才色兼備の霧島さんとまで良い関係なんて事はあるまいな……！?』

『おい、まだ姫路が好きな奴は雄二だと思い込んでるのか!?』

結局その後誤解は解けていなかったのだ

何故なら明久は自分に対しての好意には超がつく程の鈍感であるからして

「ああ。アイツとは幼馴染みだ」

「総員狙えええっ!」

「なっ!?!何故明久の号令で皆が急に上履きを構える!?!」

「黙れ男の敵が! Aクラスの前にキサマを殺してやる!」

「俺がいったい何をしたと!?!」

「いやはや災難だな雄二。モテる男は辛いね」

生物的に雄二が嫌いな将軍は現状を見て雄二を茶化す

だが、これを見逃す程雄二は甘い人間ではない

「そう言うなら将軍、テメエこそ試召戦争中にBクラスの女子2人に告られてただらうが！」

「将軍！やっぱり君は僕の敵なのか！」

「こつちを向くな！あの後丁重に断つたんだよ！断つたけど、まだ諦めませんかと言われてどうしようかと」

「君は47人分の靴下をくらうべきだ！」

「それなら貴様らにはこいつを贈呈してやる。あの世への片道切符だ」

將軍は懐から自作した銃を明久達に向ける

右腕に付けられしは毎分300発の弾丸を吐き出すガトリングギヤ  
ノン

左腕に付けられしは高熱の炎を発するガスバーナー

上履き程度で勝てる訳がない

「全員回れ右！狙いを雄二に絞れ！」

危険度を察知した明久及びFクラスの大半は振り返って上履きを構え直す

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ美人だし……えっ？何で姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと島田さん、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険な物を投げようとしてるの！？」

『姫路が明久を好いているって事態が嘘に見えてくらあ……』

カオスな場面に將軍は顔をしかめながら疑問を浮かべる

考えてる本人も充分カオスなんだがそこはスルー

「とにかく、俺と翔子は幼馴染みで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度覚えた事は忘れない。だから今、学年トップの座にいる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は  
システムデスクだ！」

自信満々の声

雄二を筆頭にしたFクラス首脳陣は宣戦布告するべくAクラスの教

室へ向かった

## 対Aクラス戦の秘策（後書き）

次回はいよいよオリキャラの登場です！

## 2人の幼馴染み

問 以下の問いに答えなさい。

「PKOとは何か、説明しなさい」

姫路瑞希の答え

「Peace - Keeping Operations (平和維持活動) の略。」

国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動の事」

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え

「Pants Koshi-tsumi Oppaiの略。

世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体の事」

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思ってるのですか。

将軍の答え

「Pocky Kuisugui Oh my good!の略。

お菓子のポッキーを食べ過ぎて体重が大変な事になってしまった被害者の会」

教師のコメント

某お菓子メーカーの職員全員に謝罪してください。

吉井明久の答え

「パウエル・金本・岡田の略」

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です。

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

雄二を筆頭に明久、瑞希、美波、秀吉、ムッツリーニと言った首脳陣はAクラスに足を運び、宣戦布告をしていた

將軍は途中でトイレに行ったから後で合流するらしい

「うーん、何が狙いなの？」

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

雄二と交渉しているのは秀吉の双子の姉、木下優子

雄二の話に彼女は訝しむ

学年最下位クラスが学年トップに挑む事自体が不自然なので裏があると考えるのが自然

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事が出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを」

「乗ってやれば良いじゃない。その戦争」

木下優子の声を遮る誰かの声

その方角を見ると、ドクロ付きリボンと言う奇抜なアクセで髪を束ねたツインテールの女子が前に出る

「誰だ？」

「はあ？人に名前を聞きたいなら自分から名乗りなさいよ。マナーって物を知らないの？」

物凄く高圧的かつ傲慢そうな振る舞いに雄二は一瞬イラついてしまう

「……………坂本雄二だ」

「坂本雄二」……………決めた。あんた今からブサイクね」

「だそうだ明久。お前はバカ改めブサイクだと」

「そこでどうして僕の名前が出てくるの？」

「あんた耳おかしいの？あたしはあんたに向かって言ったのよ」

「はあっ!?!」

いきなりの罵倒に雄二は席を立ち上がって抗議

「待てやコラ！俺が明久よりブサイクだと!?!」

「当たり前前の事ですよ。こんな落書きみたいなゴリラ顔、ブサイク

以外にどう表現しろって言うの？」

「刹那<sup>せつな</sup>。ブサイクは言い過ぎだと思っ

刹那と呼ばれた女子の後ろから、身長ぐらいの長さはあるおとげを  
持つ銀髪の女子が仲裁に入る

「何よ風<sup>なまき</sup>。まさかこのブサイクをフォローするの？」

「違っよ。せめて動物園のボスゴリラにしてあげたらどうかなって」

「分かったわ。と言う訳であんた、今からブサイクゴリラね」

「もっと酷くなってるじゃねえか！しかも仲裁に入った奴まで俺を  
罵倒すんのか！」

度重なる罵倒に雄二は腹を立てる

「ゴリラがウホウホうるさいわね。そこにいる吉井明久に比べたら、あんたなんて人間の部類にカテゴライズする必要が無いわ」

今までで一番の罵倒に雄二はもう冷静ではいらなかった

しかし、何故明久の名が挙げられたのか？

「君、何処かでお会いしました？」

「なあに丁重な挨拶かましてんのよ。幼馴染みのあたし達を忘れたの？」

「「幼馴染みっ!?!」」

刹那の言葉にFクラス首脳陣（特に瑞希と美波）は驚く

明久は首を傾げるが、数秒経ってアツと目を見開く

「思い出した……！まさか、刹那……！？」

「正解。やっと思い出した？ヨッシー」

「お久しぶりです。隊長<sup>モジモジ</sup>」

「って事は、その子はなっちゃん!？」

「またまた正解、気付くのが遅すぎ。ヨッシー以外の人間に自己紹

介をしとくわね、あたしは織田切刹那。ヨッシーの幼馴染み、以上」

「初めまして、月詠風です。隊長とは……その……小学校時代の同級生です」

自己紹介を終えた2人

この後、Aクラスの教室に大嵐が吹き荒れる事になるかもしれない

……

## 2人の幼馴染み（後書き）

遂に出ました！明久の幼馴染み

次回はヤバい事になりそうです……

交渉？いいえ、交死ようです

「「「どういう事よ吉井！（ですか吉井君！）」」

真っ先に明久に飛び掛かった瑞希と美波

その顔、と言っか全身から異常な程殺気が

「えっ？何で2人して殺気立ってるの!？」

「ちよつとそこの2人うるさい。ヨッシーの幼馴染みだつて言ってるでしょ？て言っか何であんた達が必死になる必要がある訳？」

刹那は高圧的な態度で瑞希と美波に話し掛ける

「そもそも、あんた達こそヨッシーの何なのよ？」

「な、何ってそれは……吉井はウチのサンドバッグよ!」

「そこは友達って言うべきなんじゃないの!？」

「サンドバッグねえ……それ本気で言ってるとしたら、あんた只のバカよ? だったらとやかく言う資格なんて無いじゃない。でしょ、  
凧?」

「はい。それに隊長をサンドバッグ扱いするとは無礼の極みです。  
そんなあなた達を隊長に近付かせる訳にはいきません。危険なオ  
ラが見えます」

「あなただつて吉井君に近付き過ぎです!」

「あたし達は幼馴染みだから良いの。大体友達でも何でも無いあんな達には関係無いでしょ?」

刹那の言葉が2人の心に突き刺さる

「いや刹那。2人は一応クラスメイトなんだけど」

「ったく。姫路や島田だけでなくあと2人も幼馴染みって、こんなバカの何処が良いんだか」

パコッ！（雄二が明久の頭を叩く）

シュッ、グチャッ！（凧が一瞬で雄二の顔面にカカト落としをくらわす）

いきなりの事態に刹那以外の人間は凍り付いた

「な、なっちゃん……？」

「隊長に危害を加える人は殺します」

その目に偽りが無い事に更に恐怖が増す

「言い忘れてたけど、凧の家は空手道場やってるし本人は三段だから。あんまりヨッシーに関して調子に乗らない事を忠告しとくわ」

「か、空手道場って……」

「躊躇いなく振り下ろしたのう……」

「……………チツ。短パンだった」

「ムツツリーニ。こんな状況でもエロに反応できる君はホントいろんな意味で凄いよね」

ムツツリーニは首を横に振るがもつ気にする必要もないだろう

「いやあ、遅れてすまねえ……って何コレ？俺が来る間に何があった？」

そこへやつと来た將軍

雄二が血だらけで頭が床にめり込んでいる光景が彼の目に入った

「なるほど。そこのお二人は明久とは小学校時の同級生で、明久は2人がこの学園にいる事を知らなかったのか」

「う、うん。今初めて知ったんだ」

「いやいや、お前トンでもない女子2人と幼馴染みなんだぞ？織田切刹那は父親が捜査一課の警部、月詠凧は月詠流空手道場師範、月詠泰山さんの娘。そんな有名な人達の子供を忘れるとは思えないんだが……」

ちなみに將軍は織田切警部、月詠泰山のファンだったりする

『警察と空手道場の……』

『そんな人達が吉井君とお知り合いだなんて……ズルいです』

瑞希と美波は互いの状況の悪さを感じながら話し合っていた

將軍はそれに気付くも、厄介事を増やすのはやめておこうと雄二を放置したまま話を進める

「んで、試召戦争の件なんだが。話はもう終わっちゃったか？」

「まだよ。凧がその交渉人を殺したから」

「いや、死んではないよ！？血まみれだけど微かにピクピク痙攣してるから一応死んでないよ！？」

「本当ですか隊長？なら今すぐトドメを

」

「刺すな！話を進めさせてくれ！」

トドメのカカト落としを繰り返そうとした凧を止める將軍

一騎討ちについて話を戻す

「試合形式はさつき雄二が言った通り、一騎討ちで良いのか？」

「勿論、でも只の一騎討ちじゃつまらないわ。互いに7人を選抜して、七回の内四回勝った方の勝ちって言うのはどう？」

「7人か。代表同士の一騎討ちにしないのは、こっちには姫路もしくは俺が出てくるのを防ぐ為か」

今までの功績を考えてるようできっちり警戒はしている

その辺は流石Aクラスと言ったところだ

「分かった。その形式で行こう。ただし、科目の内容は7つの内4つはこっちで決めさせてくれ。それくらいのハンデは良いだろ？」

「別に構わないわ。せめてもの情けね」

試合方式は決定した

開始時刻は10時で場所はこのAクラス教室

Fクラス（バカ）対Aクラス（エリート）の戦いが直に始まる………

『でも大丈夫なのかな？姫路さん』

『何でそこで姫路を心配するんだ？』

『いや、だって……あの後、霧島さんから「負けた方は何でも  
つ言つ事を聞く」って言われたから』

『それがどうしたんだ？』

『霧島さんは女の子が好きだから、負けたら姫路さんの貞操と人生  
観が……』

『……っっ』

**開戦！FクラスvsAクラス（前書き）**

アクセスが二万に達しそうです。ありがとうございます。

## 開戦！FクラスvsAクラス

問 以下の問いに答えなさい。

「バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい」

姫路瑞希の答え

「リトアニア エストニア ラトビア」

教師のコメント

その通りです。

土屋康太の答え

「アジア ヨーロッパ 浦安」

## 教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

## 将軍の答え

「ポルトガル テニアン トリニダード・トバゴ」

## 教師のコメント

頭文字を並べてバルト三国と言つ意味ではありません。それにこれではポテトになってしまいます。

## 吉井明久の答え

「香川 徳島 愛媛 高知」

## 教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていない事に違和感を覚えましょう。

## 決戦時刻の10時

巨大なプラズマディスプレイ、冷暖房完備、冷蔵庫にノートパソコンが個人部屋に一台ずつ

Fクラスの設備と比べても月とすっぽん

しかも担任は美人で才女の高橋女史

とことん羨ましい限りである

「くそつ。まだ顔が痛む」

「最初に見た時はふざけてんのかと思ったが、顔面に力カト落としとはなかなかエグい」

「明久、てめえのせいで勝手に話を進められたんだ。後で覚えてろ」

「何で僕のせいになるの！？あれは雄二が悪いんじゃないか！」

雄二の勝手な言い分に反論する明久

そもそも力カト落としをくらったのは雄二の自業自得とも言える

「雄二、自分の非を認めずに他人に押し付けるのは卑怯者もしくはガキのやる事だ。クラス代表のくせにガキ臭い事しか出来ねえのか？」

「一人だけトイレに逃げ込んだテメエに言われたくねえな。その將軍って名前に腰抜けの烙印でも付けてろ」

「ほう……良い度胸じゃねえか。新しく作った青竜刀の餌食になりたいか？」

雄二の発言にムカついた將軍は背中から青竜刀を出して刃先を向ける

その珍妙な光景にAクラスはざわつくが……

「優子。あの人、前にボク達を助けてくれた人だよ？」

『しかも將軍って……………』

將軍を指差す愛子と顔を赤くする優子

2人は以前、シーフード軍団（笑）に襲われていたところを將軍に助けられた

その夜、優子は將軍の事が頭から離れなかつたらしく、彼から渡された上着を着たまま寝てしまったとか

『どっしりよう……………！？まともに見れない！』

將軍は気付いていないものの、優子は心臓が飛び出すんじゃないかってくらい鼓動が早くなる

「では、両名共準備は良いですか？」

「……………問題ない」

「あ、大丈夫です」

將軍（青竜刀）と雄二（素手）は殴り合っているので明久が代わりに答える

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシが行くよ」

Aクラスからは木下優子が出てくる

対するFクラスの一人目は

「はぁ……はぁ……こっちの一人目は島田だ。頑張ってこい」

「任せといて」

Fクラスからは美波が先陣を切る

勝負科目はFクラスの選択権により数学

軍服にサーベルを持った美波の召喚獣が展開される

Fクラス 島田美波

数学 201点

「数学だけならウチはBクラス並の成績を持つてるのよ」

「それは凄いわね。サモン！」

Aクラス 木下優子

数学 325点

点数差100点以上

西洋鎧とランスを装備した優子の召喚獣に一撃で倒されてしまった  
美波の召喚獣

「アタシは勿論、Aクラス並だけどね」

負けた美波は落ち込みながら陣営に戻る

「ごめん。負けちゃった……」

「気にする事ないよ。Aクラス相手に胸の薄い美波が勝てるとは思ってなかった右腕がいつの間にか捻られているうっうっうっ！」

「胸が薄いは関係ないでしょ!？」

「K-1より凄いと聞いたところだが、今すぐやめた方が良くぞ島田。向こうで獣が噛み付こうと躍起になってる……」

Aクラスの方に目をやると、飛び掛かろうとしている銀髪の獣が刹那に押さえられていた

「……………っ！……………っ！」

「落ち着いて風！今ここで殺つたら不正行為で負ける！」

怒り心頭の風の姿にAクラス生徒は怯えを隠せず、美波も自然と関節を極めてる手の力が緩む

「……………コホン。では、二回戦を始めます」

気を取り直して二回戦

Aクラスからはさっきまで獣化していた月詠風

「じゃあこっちからは須川。お前逝ってこい」

「俺がか？」

「ああそつだ。俺はこのクラスを信じている。だから」

「ふっ、仕方無いな。そこまで言うなら行ってやるつじじゃないか」

「ありがとう須川。俺はお前が」

Aクラス 月詠凧

化学 287点

VS

Fクラス 須川亮

「 秒殺される事を信じている」

「 負ける方に信じていたのか!？」

「 悪いな、お前は数合わせの為の捨て駒。勝ちの頭数に数えてないんだ」

改造空手道着と手甲を装備した凧の分身は、將軍の言った通りザコを秒殺した

「 …… 將軍。人の事言えないんじゃないか？」

「 明久や俺みたいに操作慣れしておらず、点の低い奴がAクラスに勝てる訳ねえだろ」

バツサリした切り捨て発言に須川は血涙を流す

2連敗してしまったFクラス

次に負けてしまうと後がない

三回戦、Aクラスからはショートボブカットの眼鏡少女 佐藤美穂

科目は物理を指定してきた

「将軍。ここは僕に任せてよ」

「え、お前物理得意だったっけ？」

「これ以上負けちゃったら、もう後がなくなる。この勝負で僕の本気を見せてあげるよ」

自信満々に言う明久

その言葉を信じて任せる將軍

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……」

「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない。今まで隠してきたけれど、実は僕」

明久は大きく息を吸い、ポーズを決めて告げる

「左利きなんだ」

Aクラス 佐藤美穂

物理 389点

VS

Fクラス 吉井明久

物理 62点

左利きの観察処分者は、先程の須川と同じように秒殺された

「明久くん。君は何考えてんですか？勝負を舐めてるんですか？」

「……………すみません（ズキズキ）」

「召喚獣勝負にいいいい、右利き左利き関係ねえだろうがああああ  
ああああっ！」

この日、將軍の怒りメーターは200%を越えた

## 決着！Aクラス戦

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

「（ ）年 キリスト教伝来」

霧島翔子の答え

「1549年」

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

「雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993」

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

ただ今の戦績は3戦0勝3敗

次の勝負で負ければ自動的にAクラスの勝利が決定する

「もうこれ以上勝ちはやれねえ。俺が出る」

「それなら、あたしが相手になってあげるわ」

次の試合はFクラス將軍 vs Aクラス刹那

2人が前が出る

「教科は現国だ。サモン！」

「良いわ。サモン！」

双方の魔法陣から徐々に姿を見せる召喚獣

刹那の召喚獣はミニスカドレスと軽鎧に大きめで少し変わった形の  
薙刀と言う装備だった

Fクラス 将軍

現代国語 355点

VS

Aクラス 織田切刹那

「点数差は100点以上か。だが戦争は何が起こるか分からない」

「その通り。それに、あたしの武器は普通の武器とは大違いよ」

そう言うと刹那は自分の武器をカチャカチャいじくり始める

「っ！武器の形が変わっていく!？」

将軍が驚いている約2秒の間に、薙刀は鎖鎌へと変形した

「びっくりするのはいねからよー」

鎖で繋がれた宝玉が刀に絡み付く

「くっ！召喚獣勝負でこんな武器もありなのか……！？」

「何が起こるか分からないって言ったのはあんたで……っしょ！」

刀を奪い取られた將軍は銃剣に持ち替える

刹那は自慢する様に再び武器を変形させる

「大鋏か。いったい幾つに変形しやがんだ、その武器は？」

「最初の薙刀から鎖鎌、大鋏、ブーメランに弓。この武器は幾つものパーツで構成されてるのよ」

「5つか……パズルみたいな武器だな。あんたパズルの類いが得意なのか？」

「まあね。昔ルービックキューブの大会に出場した事がある程度だけど」

刹那の意外な経歴にへえ〜と声上がる

「お喋りはあんまり好きじゃないから、さっさと終わらせるわよ！」

大鍬の刃を開けて突っ込んでくる刹那の召喚獣に対し、銃剣を乱射させる將軍

刹那は直ぐ様大鍬の刃を閉じ、横にして銃弾を防ぐ

「こんなんじゃ止まらないわよ！」

「残念。足がガラ空きだ」

將軍が上半身を中心に撃っていたので足までには注意が行ってなかった

一瞬の隙を見て足を撃って動きを止めさせ、銃剣の刃先で喉を刺し、相手を戦闘不能にした

「はぁ……はぁ……結構疲れた」

「まだブーメランと弓を見せてないのに……！」

「そこまで待つ暇が無いんでね」

将軍の勝利にFクラス陣営はイエーイ！と大合唱

だが、まだ油断は出来ない

あと一回負けたら終わりだと言う事態は変わっていないからだ

「では、五人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

「じゃ、ボクが行こうかな」

ムツリリーニと愛子が出てくる

「聞けば奴は総合科目の八割を保健体育で獲得してるんだっただな？」

「うん。この単発勝負ならAクラスにだって負けないよ」

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

ムッツリーニの唯一にして最強の武器が選択された

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？…………キミとは違って、実技だね」

愛子の問題発言にFクラス男子は大興奮

将軍はアツと驚く様に何かを思い出した

「あ！あなた、あの時の！？」

「ヤッホー、あの時はありがとね。良かったらキミにも保健体育を教えてあげよっか？もちろん実技で」

「ちよつと愛子！？」

将軍にウインクしながら誘惑する愛子とギョツとする優子

将軍の背中にまた殺意を込めた視線が突き刺さる

「「將軍コロス將軍コロス將軍コロス將軍コロス將軍コロス將軍コロス」」

「將軍……君は僕の味方の筈だよ……？味方だって言つてよ……？」

「ちよつ、今の明久怖い！完全に目から光が消えてるって！」

「そつちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげよっか？もちろん実技で」

將軍に光なき妬ましい視線を送っていた明久に気付いたのか、愛子が指名してきた

指名された明久は正気に戻る

「フッ。望むところ」

「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……………（大号泣）」

「姫路に島田。お前ら人の心を抉って楽しいか？」

將軍は呆れながらツッコミを入れる

バタバタバタっ！（飛び掛かろうとした風が押さえられる）

「ちよっ、風！あなたの試合は終わったんだから前に出なくていいって！」

「放して刹那！隊長に対する無礼な言葉を許せない！この場である2人、人体にある216本の骨を粉々にしないと！」

凧の物騒な言葉に瑞希と美波だけでなく、將軍も雄二もビビってしまっ

「骨を砕くのは勝負が終わってからにしない！」

「おいそこ！殺人予告を公認するな！」

奇天烈なやり取りが繰り広げられる中、ムツッリーニと愛子が召喚を開始する

前回、前々回では出番が無かったムツッリーニの召喚獣は忍装束に小太刀の二刀流

対するは

「何だあの巨大な斧は!？」

「しかも例の腕輪までしてやがる!コイツはかなり強いぞ!」

セーラー服に巨大斧、そして特殊能力の腕輪を装備した愛子の召喚獣

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

巨大斧に雷が宿り、猛スピードでムツツリー二の召喚獣に詰め寄っていく

「それじゃ、バイバイ。ムツツリー二君」

斧が召喚獣を真っ二つにしようとした直後

「……………加速」

「……………え？」

突然ムツツリー二の召喚獣の姿がブレ、敵召喚獣の真後ろにいた

一呼吸置くと、愛子の召喚獣が消滅した

Aクラス 工藤愛子

保健体育 446点

V S

Fクラス 土屋康太

保健体育 572点

「572点!? 保健体育だとこんなに点数が高いのか?!?」

「下手すると僕の総合科目並の点数だ!」

「全部であれば低すぎないか?」

「そ、そんな……! このボクが……!」

相当ショックなのか、床に膝をつく愛子

あと一勝すればイーブンになる

「次の方は?」

「あ、は、はいっ。私ですっ」

「それなら僕が相手をしよう」

Fクラス側は瑞希

Aクラス側は学年次席、久保利光が出てくる

「ここが一番の心配どころだ」

「そうだな。あの2人の実力は殆ど互角。不得意科目を突かないと負けるかもしれねえな」

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

総合科目は学年の順位がそのまま強さに反映される

「ちよつと待った！何を勝手に」

「構いません」

「姫路さん？」

クレームをつけようとした明久を止める瑞希

心配する明久だったが、一瞬で決着がついた

Aクラス 久保利光

総合科目 3997点

V  
S

Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4409点

「マ、マジか!?!」

「いつの間にこんな実力を!?!」

「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!?!」

点数差400オーバー

尋常じゃない強さに誰もが驚いた

「ぐっ……!?! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……!?!」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいるFクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから頑張れるんです」

瑞希からの嬉しい台詞に明久と將軍は笑顔になる

これで三対三となり、いよいよ次が最後の勝負だ

Aクラスからは霧島翔子

そしてFクラスからは雄二

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

雄二の宣言でAクラスにざわつきが生まれる

高橋女史はノートパソコンを閉じ、教室を出ていく

「雄二、あとは任せたよ」

「負けんなよ大将」

「ああ。任された」

その後、ムツツリーニがピースサインを向ける

「坂本君、あの事、教えてくれてありがとうございます」

「ああ。明久の事が。気にするな、後は頑張れよ」

「はいっ」

何故僕が話に出てくるんだろう？と明久は疑問に思い、將軍はやれやれと呆れポーズ

最後の勝負を行う為、霧島翔子と雄二が視聴覚室に向かう

巨大ディスプレイに映る2人と日本史担当の飯田先生

問題用紙が配られ、テストが始まる

「これであの問題が無かったら俺達の負けだ」

「うん。でも出ていたら、僕らの勝ちだ」

ディスプレイに問題が映し出される

「次の（ ）に正しい年号を記入しなさい」

( ) 年 平城京に遷都

( ) 年 平安京に遷都

( ) 年 鎌倉幕府設立

( ) 年 大化の改新

「出て、いた……………」

「よ、吉井君っ」

「勝った……俺達の勝ちだあああああっ！」

「うおおおおおっ！」

日本史限定テスト100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

Fクラスの卓袱台がみかん箱になり

「あのクソゴリラあああああああっ！！！」

視聴覚室に向かった將軍は斧、鎌、槍、日本刀、ガトリング、火炎放射機、その他諸々の武器を全身に武装した人間兵器と化していた

決着！Aクラス戦（後書き）

見事に期待を裏切りやがった雄二。將軍よ殺しちゃえーっ！と言っ  
心の声です。

「途な想いは応援すべし……!？」

「四対三でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込む明久達

先頭に立つ將軍は両手に持っている武器をギリギリと握り締める

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「良い度胸だ、ブチ殺してやる！歯を食い縛れ！」

「明久、俺のチェーンソーを貸してやる！このクソゴリラをバラバラの肉片にするぞ！」

將軍が明久にチェーンソーを渡し、2人同時にスイッチを入れようとするが瑞希と美波に止められてしまう

「だいたい53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと」

「いかにも俺の全力だ」

「何偉そうにほざいてやがんだ負け犬があ！今すぐブツ殺してやる」

「將軍は上半身を、僕は下半身を切り刻むよ！」

「吉井、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しな　いや、否定出来る！將軍から日本史を教わったから40点は取れる！」

「殆ど変わらないじゃない！」

「それなら坂本君を責めちゃダメですっ！」

「いや、コイツは大見得切って勝てるとほざいた癖に負けやがった！Fクラス全員の期待を裏切った罪は重い！」

「將軍の言う通り、このバカには喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なんだよ！」

「それは体罰じゃなくて処刑です！」

「明久、そんな殺り方は生温過ぎる！まずは両目を抉り取って踏み潰す！その後には四肢を切り落として顔の上半分を消滅させてやるのが正しい体罰だ！」

「はい、ストップストップ」

後ろから刹那と凧が將軍に手錠をかけて拘束

將軍は手錠を引きちぎろうと試みたが無理だった

「放せ！あのゴリラに罪を償わせてやる！」

「慌てないの。あんた達が手を下さなくても、あのブサイクゴリラは終わるから」

「……？どっいつ事？」

刹那の言葉に將軍と明久はおとなしくなる

その意味が理解できていないからだ

そして霧島翔子の口から告げられる

「……………雄二、私と付き合って」

「……………はい？」

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……………私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

「えっ、何？霧島さんは女の子が好きじゃなかったの？」

「違う。最初から好きな相手がいたから他の男子に興味が無かっただけ」

「つまり、一途な想い故の噂だったんです」

2人はあぁと手を打ち付けて現状を把握した

「拒否権は？」

「……無い。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに」

「うわゝ最低。自分から約束を破るなんて」

「人間のクズです」

「あれは将軍が勝手に話進めたからだ！テメエ責任取って何とかしろ！」

雄二はAクラスとの交渉時、凧に力カト落としをくらわされ死んでいた（違うけど）ので将軍が代理で試合方式やその後の事を話していた

なので、雄二は全て将軍のせいだと丸投げ

その態度にムカついた将軍は霧島翔子に近付き懐からある物を渡す

「霧島だったっけ？カップル成立記念にこれをプレゼント」

渡したのは手枷とスタンガン（50万ボルト）

「万が一襲われたらコイツで迎撃を」

「デメエコラ！」

「……………あなたは良い人。でも大丈夫。雄二になら襲われても良い」

「じゃあ雄二、逝ってらっしゃい（笑）」

「（笑）じゃねえ！テメエ覚えてろ！生きて帰ったらブチ殺してやる！」

いきり立つ雄二は首を掴まれながら霧島翔子と共に教室を去った

そして生活指導担当の鉄人（西村先生）がいつの間にか教室に立っていた

「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思っ  
てな。」

「ん？我がFクラス？」

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうさ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「「「なにいつ!?!」「」「」

將軍以外の男子生徒全員が悲鳴をあげる

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからと言って、蔑ろにしていい物じゃない」

「そうですね。無様な点を叩き出した雄二が良い例えだ」

「吉井、將軍。お前らと坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の 観察処分者 2人組、その片方は学内最高危険人物とA級戦犯だからな」

「ええっ！？何で俺まで！？」

「当たり前だ。学園にチェンソーなどの凶器を携帯してる奴を監視しない訳ないだろう」

將軍はグウの音も出せなかった

「そうはいきませんよ！何としても監視の目を掻い潜って、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「……お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

明久のやる気の無さに鉄人は溜め息混じりの台詞

だが、この時の明久にはちょっとだけやる気が出ていた

負けたクラスは3ヶ月の間宣戦布告が出来ない

だから力を付けて、3ヶ月後にまた試召戦争を起こして勝てば鉄人から逃れる事が出来る

やってやるんじゃないか！と意気込んでいるところに、刹那と凧が明久に歩み寄る

「ヨッシー、この後喫茶店に寄っていくけど……どっつっ。」

「隊長、今日くらいは羽目を外しても罰は当たりません」

「えっ？待って、僕の生活費が……」

「俺の奢りだ。パーっと使ってスカッとしようぜ」

「良いの！？よかった……何とか明日を生き延びられる」

明久は生活費0の危機を脱し、心底ホツとする

「そろそろ、その2人も一緒に来なさい。話したい事があるから」

「勿論よ！吉井が変な事しないか監視しなきゃね！」

「そうです！」

「……………僕って2人に毛嫌いされてるのかな……………？」

「喫茶店では嵐が吹き荒れるな……………」

ここに転校したのは間違いだったかもしれない……

そんな考えを頭の中に過らせてしまう將軍だった

オリキャラ紹介(前書き)

オリキャラ2人の紹介です

## オリキャラ紹介

名前：月詠凧 つぐよみなぎ

イメージCV……伊藤静

2年Aクラス所属

銀髪の長いおさがが特徴で空手道場の娘（実力は三段）

小学生の頃から口下手で一人ぼっちだったが、明久が初めて友達になってくれた事から彼に好意を寄せている

ある遊びの名残から明久を「隊長」と呼び慕い、明久に危害を加えようとする人間には容赦なく攻撃する

スカートの下には常に短パンを着用している（蹴りが出しやすいから）

その為、明久や雄二並みのアクションを平気でこなす

家事や料理の腕も申し分ないが、作る料理殆どが激辛（笑）

頼れる存在に見えるが明久並みのおバカでもある

召喚獣の装備は改造空手道着に手甲

織田切刹那 おだきせしな

イメージCV…釘宮理恵

凧と同じく2 - A所属で明久の幼馴染み（明久は苦手意識してる）

捜査一課の警部を父に持ち、時折バイトとして捜査に協力したりする

凧と同じように明久を好いており、伝えたい事はハッキリと言う性格

召喚獣の装備は軽鎧付きのミニスカドレスと変形可能な薙刀（？鎖鎌、？大鋏、？ブーメラン、？弓）

将軍の財布の住人は大体が福沢諭吉（前書き）

アニメでやってた話をアレンジしてみました

將軍の財布の住人は大体が福沢諭吉

本日午後12時

明久、瑞希、美波、秀吉、將軍は刹那と凧の提案で喫茶店に行こうとしていた

「時間あるから映画見に行く？」

「え、映画……!?!」

映画のチケット、それも7人分となると値段が張る

明久は基本的にゲームや漫画等に生活費を使っているため食生活は乏しい

故に映画館での出費に狼狽してしまう

「將軍。出来れば助けて下さい」

「断る。金の管理は独り暮らしの必須事項だから管理出来る様になりましょう」

將軍は明久に喝を入れる

生活費に関しては明久が悪いので本人も反論出来なかった

「負けたから奢るのは当然でしょ」

「でも刹那、5人のチケット代は高いよ。私達は自分で払おう」

「ん〜、まあ仕方無いわね。ヨッシー、あたし達は自腹で払うわ」

明久は少しだけホツとするが、それでも3人分のチケットや飲み物、食べ物も買わなきゃならないので生活費が危機に陥るのに変わりはない

「まあ、今日くらいは覚悟しとこつや」

將軍は自分の財布から福沢諭吉を一枚取り出す

その瞬間、明久に手首をチョップされる

「痛っ！何すんだ！しかも俺の一万円パクるな！」

「お願いだ將軍！君の協力があれば僕の食費が消滅しないで済むんだ！」

「ふざけるな！借りた金を返せない様な人間に貸す金など無い！」

一万円を放さない明久

手首を捻って一万円を奪還しようとする將軍

そこへ聞き覚えのある声が割り込んできた

「観念しろ明久。男とは……無力だ」

「何だ負け犬ゴリラか。随分と奇抜なファッションで」

今の雄二は両手に手枷が付けられ、それから伸びる鎖は翔子が握っていた

「……………雄二、どれが見たい？」

「早く自由になりたい」

「代表。今日放映してる中で一番長い映画はあれよ」

刹那が追い打ちをかけるように放映リストを指差す

「……………じゃあ、それを見る」

「おい、それ7時間4分もあるぞ!?!」

「……………2回見る」

「14時間8分も座ってられるかあ!」

2回も見たら日付が変わる上に尻や腰が大変な事になりそうだ

「……………今まで会えなかった時間の埋め合わせ」

雄二は無理矢理手を振り払って帰ろうとした

「……………今日は逃がさない」

「おい翔子、そのスタンガンで何をすギャアアアアアッ！」

翔子は將軍から貰ったスタンガンで雄二を黒焦げにし、受付まで引きずっていく

「すげえ、躊躇い無くスタンガンを……………」

「……………学生2枚、2回分」

「はい。学生一枚、気を失った学生一枚、無駄に2回分ですね？」

なんで今を見て普通に対応出来てんだ？と將軍は受付嬢の凄さに  
びっくり

そして、なるべく短い映画にしておこうと呟いた明久と將軍だった

「面白かったですね」

「でしょ？ラストも良かったけど、カーチェイスの場面はハラハラ  
したわ」

「うむ。手に汗握る展開じゃったのう」

「……………映画館、得る物はあつたけど失う物もあつた（泣）」

「泣くな明久。覚悟の上だろ？」

映画館から出た明久一行は喫茶店へと向かおうとした

「おねー……さまー……っ！」

「な、何か走ってきたぞ!？」

「み、美春!？」

明久一行の前に現れたのは前にも一度会った事がある女子

数日前の昼食時、将軍がジャーマンスープレックスで気絶させた清水美春だった

「あ、あなたはあの時のドリルっ娘！」

「誰がドリルですか！以前は不覚をとりましたが、今日こそはお姉様との甘い時間を邪魔させません！」

「……………ヨッシー、誰あいつ？」

「何だかヤバいオーラが見えています」

「え〜つと、彼女はDクラスの清水美春さんで……………島田さんのお知り合い」

「違います！お姉様の恋人です！」

その発言に刹那と凧はバックステップで美波から距離を取った

「なに？あんな同性愛？」

「人は見掛けによりませんね」

「違うわよ！ウチは普通で、ちゃんと男子が好きなんだから！」

「いけませんお姉様！そんな愚劣なブタ共といえるなんて！」

ブタ呼ばわりされた事に將軍は懐に手を入れる

勿論カチンときたので武器を取り出す為にだ

「お姉様と映画を見た罪、万死に値します！覚悟しなさいブタ共！」

「え！？僕も入ってるの！？」

清水美春が手に持ったシャーペンやコンパス等の文具、更にはフォークを明久と将軍目掛け投げた

「本邦初公開、双龍阿修羅あ！」

「隊長危ない！」

将軍は自作した二丁の銃（戦国無双、独眼竜が使ってる武器）で撃ち落とし、凧はおさげを鞭の様に振って明久を護衛

「凧のおさげはやっぱり便利ね」

どうやら凧のおさげは普段からこんな使い方がメインらしい

「隊長に凶器を投げるとは……………粉碎します（ゴォッ!）」

「うおっ！月詠から金色の闘気が!？」

サ ヤ人並の戦闘力を剥き出しにした凧は超スピードで距離を詰め、  
渾身の肘鉄を美春の鳩尾に入れて沈黙させた

騒ぎに気付いた警備員を振り切り、明久一行は喫茶店に入店

「で、席はどうすんだ?」

「男子と女子に別れるわ。ちょっとこの2人と話したいから」

凧の提案により、男子陣と女子陣に別れて座る事にした

女子陣

「振り分け試験時に熱出して途中退席、悪いけどそれは自業自得ね」

「そうなんですけど、吉井君はそんなのおかしいって抗議してくれました。私が悪いのに必死で……………」

「隊長は昔からそういうお人なんです。自分の事よりも他の人を優先させて……………優しい」

「風は小学校の時、ヨッシーに助けられた事あるからね。それ以来ゾッコンな訳」

「……………！刹那……………！！」

「姫路と凧がヨッシーを好きなのは分かるけどさ、あんたは何でヨッシーにいつも食って掛かってるの？」

「なっ、何よいきなり！？べ、別に吉井の事なんて何とも」

「顔を真っ赤にして否定しても説得力は皆無よ？」

「本当はあなたも隊長の事が好きなんですわね」

「~~~~~っ！」

この陣は恋愛話で盛り上がってるようだ

男子陣

「しっかし明久、何つーかお前が羨ましいな。両手どころか両足にも花じゃないか」

「お主にあれ程の女子が集まるとは思わなかったぞい」

「いや……………なっちゃんはともかく、刹那は島田さんと同じくらい苦手なんだ。小学校の頃、いつも馬を強要されるわ……………椅子にされるわで大変だったよ……………」

「悪の女王が2人みたいな感じか、同情しちまうよ……………」

「と言うより、島田が2人じゃのう」

「……………生きていられるかな？僕……………」

……女子陣とは真逆に、葬式みたいな雰囲気になっていた男子陣だった

将軍の財布の住人は大体が福沢諭吉（後書き）

次回はオリ話です。

閑話 凧の料理はギネス並の辛さ(笑)(前書き)

今回のバカテストはアニメの番宣問題を載せてみました。

閑話 凧の料理はギネス並の辛さ(笑)

問 次の( ) に当てはまる言葉を記入しなさい。

「私は( )を望みます」

吉井明久の答え

「今月の食費」

木下秀吉のコメント

「わびしい奴じゃのう……………」

月詠凧の答え

「たっ…………たたたた隊長とデデデデデデ  
」

木下秀吉のコメント

「少し落ち着くのじゃ」

織田切刹那の答え

「ヨッシーが織田切家に婿入り又は養子縁組に入る事」

木下秀吉のコメント

「姫路と島田が釘バットを持って明久の方に向かっていったのじゃが……………」

將軍の答え

「秀吉は男の筈なのに女子と言われるミステリーの解明」

木下秀吉のコメント

「ワシは元から男じゃっ！」

「負けて設備がランクダウンしたって聞いたけど、まさかみかん箱とは痛いわね……」

この日の放課後、Fクラスには2人の来客が来ていた

明久の幼馴染みである刹那と凧だ

どうやら設備を見に来たらしい

「まさか卓袱台より下があるとは思わなかったよ」

「そっじゃのっ」

「しかし隊長。このみかん箱も有効活用出来ますよ？」

凧の言葉に疑問符を浮かべる明久一同

凧はみかん箱の蓋を開いて自分の鞆をその中に入れる

「どっでしょう。卓袱台では不可能だった物品の収納が、みかん箱では可能になります」

「本当だ、凄いよなっちゃん！」

「そこ感心するところか!？」

凧のあまり賢くない打開策に感心する明久とツッコミを入れる将軍

明久に誉められたせいか、凧の顔は紅潮していた

「で、お二人はこの寂れた設備を見に來ただけなのか？」

「違うわ。ヨッシーと瑞希と美波に差し入れを持ってきたのよ。この前ので馬が合ってたさ」

この前のは明久達が映画や喫茶店に行った日の事

その際、瑞希達と話の馬が合い、互いに名前で呼び合う様になったとか

「へへ、仲良くなったんだ」

「ま、まあね。アキが変な事しないように監視する為よ」

「ん？アキって僕の事？」

「一年から一緒にいて名字で呼ぶのもなんだから、あたしが名前で呼んだら？って言ったのよ。別に構わないでしょ？」

「え、まあ良いけど………」

美波は安心しきった様な表情、瑞希は何やら今の自分が不満そうな表情をしている

それに明久以外の人間は気付いていた

「凧、早く差し入れ出しなさいよ。ここで実は忘れてきたなんて洒

落にもならないから」

「ちゃんとあるよ。ちょっと待っていてください隊長」

凧は先程収納した鞆を引つ張り出し、中身を取り出す

「随分とデカイ弁当箱だな」

「辞書みたいな大きさじゃのう」

「……………（コクコク）」

手に持った弁当箱の蓋を開け、中身を披露する凧

見事な赤みを帯びたプルプルのゼリーが皆の前に姿を見せた

「弁当箱いっぱいにゼリーって………ちょっと変だろ？」

「ゴリラはケチ言わない」

「誰がゴリラだ！」

「まあまあ、ゴリラの言う事なんて気にするだけ時間の無駄だ」

「赤いゼリーとは。さしずめ苺かスモモと言ったところかのう」

「スプーンをお渡ししますので、遠慮なくどうぞ」

スプーンを渡された明久一同

最初にゼリーを掬ったのは明久と將軍とゴリラ（笑）

「今何か不快な物を感じたが気のせいかな？」

明久と將軍は無視、雄二は引つ掛かりながらも掬ったゼリーを口に運び

「「「辛ああああああああっ！！」「」」

盛大に火を吹いた

「な、何コレ！？ゼリーなのに物凄い辛味がーっ！っ！」

「舌が！舌が痛えええええっ！」

「いいい痛いだけじゃねえ！焼ける！舌どころか顔まで焼けそうだ  
ーっ！」

「あの、凧ちゃん……このゼリーは何ですか……？」

「いったい何のゼリーなの……？」

瑞希と美波が恐る恐るゼリーの正体を聞いてみる

凧は自信満々に答えた

「特製ジヨロキアゼリーです」

「ジョ、ジョロキアだと……っ!？」

ジョロキアとはギネスブックに載った、世界一辛い唐辛子

その辛さはハバネロをも上回る

「あなたの激辛好きにはホント圧巻ね……」

「どうして?こんなに美味しいのに。瑞希達もどうぞ」

ワンスプーンの激辛ゼリーを食べても平気な凧はまだ食べていない  
瑞希達の前に差し出す

危険を察知したムツツリー二は即座に逃げようとしたが、明久と雄  
二に足を掴まれ逃走出来なくなった

「何処行くノムツツリーニ……………？せつかくなっちゃんかくレタんだから食べないと失礼だよ……………？」

「……………っ！(ブンブンブンブン！)」

「大丈夫だ……………将軍がちゃんと食べさせてくれるゾ」

「(ブンブンブンブン！)……………今は満腹……………っ！」

「さあ……………口ヲ開ケなムツツリーニ……………！」

「……………っ！(ブンブンブンブンブンブンブンブン！)」

千切れそうな速度で首を横に振るムツツリーニだったのが……………結局

激辛ジヨロキアゼリーを無理矢理食べさせられ、あまりの辛さに声を出せずにのたうち回る羽目に……………

「やはり隊長には辛過ぎましたか？牛乳をどうぞ」

明久思いの風は牛乳を渡した

牛乳を飲むと辛さが和らぐらしい

「ぶはあっ……………食べ物くれるのは嬉しいけど、あまり辛いのは……………」

「間違って目に入ったりしたら大変な事になっちまう」

反省した風に対して闘志を燃やすのは瑞希

負けじと鞆から箱を取り出し、ズイっと前に出す

「……………っ！？姫路？それは何だ……………？」

「実は私もクッキーを作ってきました！良かったら皆さん食べてくださいっ！」

ダッシュ！x5

明久達は死にたくないと言わんばかりに超スピードで教室を出ていった

余談だが、刹那と凧はせっかくだからと瑞希のクッキーを食して豪快に倒れた

その時に2人は自分達に対する嫌がらせだと受け取ってしまった…  
………

閑話 凧の料理はギネス並の辛さ(笑)(後書き)

次回から清涼祭編を書きます。

## 清涼祭編プロローグ

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

「あなたが今欲しい物は何ですか？」

姫路瑞希の答え

「クラスメイトとの思い出」

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そう言った出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

「Hな本（訂正）成人向けの本」

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

月詠凧の答え

「たたたたた隊長とこ一緒に f g k p a w o w q m c e a s m k  
y」

教師のコメント

緊張し過ぎの上、文字化けはやめてください。

織田切刹那の答え

「嘘発見機」

教師のコメント

使用目的が気になりますが、触れないようにしておきます。

吉井明久の答え

「カロリー」

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

将軍の答え

「俺の本当の名前」

教師のコメント

字の筆圧と血の痕から必死さが滲み出していますね。

「……………雄二」

「何だ？」

「……………『如月グランドパーク』って知ってる？」

「ああ。今建設中の巨大テーマパークだろ？もうすぐプレオープン  
って話の」

「……………とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

「廃病院を改造したっていうアレか？面白そうだな」

「……………日本一の観覧車とか」

「おお、相当デカイみたいだな。聞いただけでも凄そうだな」

「……………世界で三番目に速いジェットコースターも」

「速い上に色々な方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするってヤツか。どんなモンなのか分からんが、考えるだけでワクワクしてくるな」

「……………他にも面白いものが沢山ある」

「それは凄いな。きっと楽しいぞ」

「……………それで、今度そこがオープンしたら、私と」

「ああ、お前の言いたい事はよく分かった。そこまで行きたいなら」

「……………うん」

「今度友達と行ってこいよ」

「……………握力には自信がある」

「ぐあああっ！アイアンクローはよせっ！」

「……………私と雄二、2人で一緒に行く」

「オープン直後は組み合っているから嫌ぐぎゃあっ！」

「……………それなら、プレオープンのチケットがあったら行ってくれるっ」

「プ、プレオープンチケット？ケホッ、あれは相当入手が困難らしいぞ？」

「……………行ってくれる？」

「んー、そうだなー、手に入ったらなー」

「……………本当？」

「あーあー。本当本当」

「……………それなら、約束。もし破ったら」

「大丈夫だつての。この俺が約束を破るような奴に見えるか？」

「……………この婚姻届に判を押してもらおう」

「命に代えても約束を守ろう」

桜の花びらが徐々に姿を消し、新緑が芽吹き始めたこの季節

文月学園では新学年最初の行事、清涼祭の準備が始まりつつあった

454

各クラスが準備をしている中、Fクラスは校庭で野球をしていた

「吉井！こいつ！」

「勝負だ、須川君！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

「言ったな！？こうなれば意地でも打たせるもんか！」

マウンドを足で均す明久はミットを構えている雄二のサインを待つ

そして来た悪友からの指示は

『カーブをバッターの頭に』

「それ反則じゃないの!？」

デッドボール确实のラフプレー指示を無視して得意球を投げようとした明久

雄二の背後にこっそりと将軍が立ち、明久に指示を送る

『ゴリラの股間に豪速球』

こちらも（味方に対して）デッドボール確實のラフプレーを指示した

『流石は將軍、的確な指示だよ………』

普段から雄二のせいで酷い目に遭わされてる明久は、躊躇いなく豪速球を投げた

悪友の股間に

「ぐおおおおーっ！何故だあああーっ!?!」

「ナイスピッチング明久！」

「やったよ将軍！寸分の狂いなく直撃させたよ！」

将軍と明久はパチンと手を叩き合っている

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「ヤバい！鉄人だ！」

Fクラスの担任となった西村先生、通称鉄人が校舎内から走ってきた

「吉井！貴様がサボりの主犯か！」

「ち、違います！どうしていつも僕を目の仇にするんですか！？」

「野球をやるうと言いだしたのは雄二ですよ！こいつの場合は提案者が責任を取るべきだ！」

明久と将軍が弁解を主張するも、聞く耳を持ってくれないと言っか持とうとしない鉄人

将軍は仕方ないと言っ表情で明久にサインを出す

『フォークを雄二の股間に』

「違う！今は球種やコースを求めているんじゃない！そもそも変化球を使う意味がない！」

「全員教室へ戻れ！この時期になってもまだ出し物が決まっていないなんで、うちのクラスだけだぞ！」

鉄人の恫喝が響き、明久達は教室に戻された

將軍はもはや武器商人（前書き）

アクセスが三万を越えました！

## 將軍はもはや武器商人

「さて。そろそろ春の学園祭、清涼祭の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが　　とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

どうでも良さそうな態度で人に押し付ける雄二

試召戦争の時とは大違いである

「吉井君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

「直接聞いた訳じゃないから分からないけど、楽しみにしているって事は無さそうだね」

「興味があるならもつと率先して動く筈だもんな」

いつもは明るい瑞希の表情に少し翳りがさす

「んじゃ、学園祭実行委員は島田と言つ事でいいか？」

「え？ウチがやるの？うん……ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

実行委員を決める話で美波の名が上げられる

世界的にも注目されている試験召喚システムを世間に公表する場として、清涼祭期間中に試験召喚大会という企画が催される

文月学園の宣伝みたいな行事だ

「召喚大会？」

「うん、瑞希と一緒にね。ウチは瑞希に誘われてなんだけど。瑞希

ってば、お父さんを見返したいって言って聞かないんだから」

「お父さんを見返す？」

「家で色々言われたんだって。Fクラスの事をバカにされたんです！許せません！って怒ってるの」

「ほ、俺達の為に怒ってくれるとは」

「だって、皆の事を何も分かってないくせにFクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？許せませんっ」

怒ってくれるのは嬉しいが、誰が見てもFクラスはバカの集まりだ  
と思う

明久と将軍は無言で顔を見合わせる

「お前ら。話を続けていいか？」

「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話だったよね？」

「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

「ならサポーターを選出すればやり易くなるだろ。皆候補を挙げてくれ」

將軍の提案で教室内からちらほらと推薦の声が聞こえてくる

「吉井が適任だと思う」

「やはり坂本がやるべきじゃないか？」

「姫路さんと結婚したい」

「將軍でもいいだろ」

関係ないラブコールが混じっているが気にしないでおく

そこへ秀吉が手をあげてある人物を推薦する

「ワシは明久が將軍が適任じゃと思うがの」

「秀吉。僕もそういう面倒な役は出来ればパスしたいな」なんて

「それは皆同じだし、んな事言ったらいつまで経っても決まんねーよ。今拳がった連中から2人ほど選んで、その中から決めるってのはどうだ？」

「それが良いわね。それじゃ……………」

美波が黒板に副実行委員候補の名前を書いていく

候補？……吉井

候補？……明久

「さて。この2人のどちらが良いか選んでくれ」

「おい。明らかにその候補の挙げ方はおかしいだろ」

「どつするっどつちが良いと思っつっ」

「そつだなあ……。どちらもクズに変わりないんだが……」

「そつ言ってる貴様らこそが正真正銘のクズだろ！」

Fクラスのモラルの無さに將軍は頭を悩ませ、トイレに行く

「將軍じゃないか。何をしている」

「トイレに行ってたんですよ。そんな何を企んでるみたいな言い方はやめてください」

戻る途中で將軍は様子を見に来た鉄人と遭遇した

そしてすぐに教室の扉を開けて黒板に書かれているFクラスの出し物に目をやる

候補？写真館『秘密の覗き部屋』

候補？ウエディング喫茶『人生の墓場』

候補？中華喫茶『ヨーロッパ』

「…………アホみたいな物ばっかし」

「…………補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな」

鉄人の言葉に全員が驚愕する

「せ、先生！それは違うんです！」

「そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！」

「僕らがバカな訳じゃありません！」

明久を売る様な言い訳に將軍はとりあえず蹴りをお見舞いしておく

「お前らバカ、明久を売ろうとしてる時点でバカ。何処そのゆうゴリラみたいに他人に擦り付ける暇があるなら己の愚かさを見直せや」

「テメエコラ！勝手に気色悪い名前付けてんじゃねえ！」

「みつともない言い訳をするな！そもそもバカな吉井を選んだ事自体がバカな行動だと言ってるんだ！」

明久が密かに握り拳を震わせている

同級生だったら間違いなくシバき倒してると思えよう

「まったくお前達は……。少しは真面目にやったらどうだ？稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすら無いのか？」

溜め息混じりの鉄人の台詞にクラス全員目が輝き出す

少しくらいの設備の向上なら学園祭の稼ぎで何とかなるかもしれない

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

瑞希は立ち上がってやる気を表現し、クラスを煽動していた

「？姫路はやけに積極的だな？」

「そうだね。何だからしくない気がする」

クラスの中に活気が溢れてきたのは良いが、違う意見が飛び交う

その内『お化け屋敷』だの『カジノ』だの『焼きとうもろこし』だの、黒板に書いてない出し物まで拳がっってくる始末

「はいはい！ちょっと静かにして！」

美波が手を叩いて注意するが効果はなし

見るに見兼ねた將軍が懐から取り出した武器を民衆のど真ん中に投げた

畳に突き刺さったのは巨大な大文字型の手裏剣

將軍が自作した代物で、バイクなら簡単に真っ二つにしてしまう

「話が進まねーだろが。次は耳の穴を無理矢理抉じ開けんぞ」

鉄人とは別の気迫で皆を黙らせた將軍

突き刺さった手裏剣を放置して自席に座る

「もつ。これじゃ決まりそうにないから、店はさっき拳がった候補の中から選ぶからね！」

この言葉にまた不満や文句等が飛び交うが、將軍がグレネードランチャーを取り出そうとしたのが視界に入って直ぐに治まる

しかも丁寧に正座した状態で

「それじゃ、写真館に賛成の人！  
はい、次はウェディング  
喫茶！  
最後、中華喫茶！」

選挙の結果、僅差で中華喫茶がFクラスの出し物となった

こうやってテキパキと物事を進行させていく力は瑞希や明久には備わっていない

雄二の人選は強ち間違ってたようだ

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するように！」

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

「……………（スクツ）」

中華喫茶の提案者、須川と何故かムツリーニが立ち上がる

「ムッツリーニ、料理なんて出来るの？」

「……………紳士のたしなみ」

「そんなたしなみ聞いた事ねえよ。まさかチャイナドレス見たさで中華料理店に通ってたら、見よう見真似で出来るようになったとかってオチじゃねえだろな？」

核心を突かれたムッツリーニは無言で將軍から顔を逸らす

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋の所、ホール班はアキと將軍の所に集まって！」

明久はいつの間にかホール班のトップにされていた

「それじゃ、私は厨房班に

」

「ダメだ姫路さん！君はホール班じゃないと！」

「その通り！極端に女子が少ないクラスだからホールに回って客寄せをするんだ！」

何より食中毒で営業停止にしたくない……………その一心で明久と將軍が説得する

「それにほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接した方がお店として利益が痛あつ！み、美波！僕の背中にはサンドバッグじゃないよ！？」

「か、可愛いだなんて……………。吉井君がそう言うならホール”でも”頑張りますねっ」

「”でも”じゃない。ホール専任で」

必殺料理人 姫路瑞希

ホール決定

「そう考えると、島田と秀吉はホール。明久と俺は厨房に回った方が良いな」

「そうだね、適任だと思う。それに平然と武器を出す将軍がホールに立ったら、間違いなくお客さんが寄り付かなくなると思う……………」

「ああ……………それはそうだな……………」

自覚があるだけに将軍は少々傷付く

「……………やっぱりウチは厨房にしようかな？」

「え？何で突然変更を要求すんの？」

「……………っ！やっぱり私も厨房に回ります！吉井君と一緒に楽しくお料理をします！」

変更しようとした美波の視線の先には明久

それに気付いた瑞希が凄いい気迫で厨房班に回ろうとした

「明久、お前はホールに行け。何か分からんが……………お前が厨房に行ったら違う意味で大変な事になる」

「そっ、そうだね。じゃあ厨房は任せるよ」

こうしてFクラスの人並みの生活が懸かった学園祭が幕を開けた

将軍はもはや武器商人（後書き）

まだ二巻のところなのに結構しんどいです……

## 秀吉の声帯模写は神業の領域

問 学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

「喫茶店を経営する場合、制服はどんな物が良いですか？」

姫路瑞希の答え

「家庭用の可愛いエプロン」

教師のコメント

如何にも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

「スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいの物を用意し裏には口ゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを」

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

将軍の答え

「格闘・武器収納向き且つ動きやすい服装」

教師のコメント

君の基準で考えないで下さい。

吉井明久の答え

「ブラジャー」

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

「アキ、ちよつと良い？」

帰りのHRが終わった放課後、特にやる事がない明久は帰ろうとしたが美波に呼び止められる

「ん？何か用？」

「用って言うか、相談なんだけど」

「相談？何の相談なんだ？」

話が耳に入った將軍も首を突っ込む

美波が真面目な顔をしてる辺り、何か良い話では無いかと悟る

「相談？僕で良ければ聞かせてもらおうけど」

「……ひよつとして、明久が織田切や月詠と幼馴染み付き合いにあるのが許せないからどうやって処刑した方が良かったかって相談か？（笑）」

將軍が冗談混じりで発した言葉に明久は猛ダツシユで逃げようとしたが肩を掴まれ阻止された

「ごめん、冗談だ。冗談だから島田も睨むなって」

「……もうっ。アキが言うのが一番だと思っただけだよ。そ  
の、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

「うーん、それは難しいなあ……。さつきも言ったけど、雄二は興味  
の無い事には徹底的に無関心だからね」

実行委員の選挙や出し物の決定を他人に丸投げする辺り、そうだと

うなと頷く將軍

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

「え？別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

「それに明久や俺を平気で捨て駒にするような人間だからな。そんなもんお前からでやれって言われるのが目に見える」

「ううん、將軍は何も分かってない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれる筈。だって」

「そりゃ確かに、よくつるんではいるけど、だからと言って別に」

「だってアンタ達、愛し合ってるんでしょっ？」

「もう僕お婿にいけないっ！」

「何で真顔でそんな台詞が出てくるんだ！？」

明久は泣き崩れ、將軍は一步後退する

「誰が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉の方がいいよ！」

「……あ、明久？」

偶然近くにいた秀吉の動きが止まり、徐々に顔が赤みを帯びていく

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんな事を言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ、歳の差とか………」

「ひ、秀吉！違うんだ！物凄い誤解だよ！さっきのはただの言葉の  
アヤで！」

「障害つつつても俺達は同い年だろ！いや、それ以前に何で顔を赤くしてんだ！？」

男だと理解してる筈の秀吉の反応を見て將軍はギョツとする

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？あ、うん。そういう事になるかな」

「詳細を聞かせてくれないか？何故そこまで喫茶店に拘るのか」

將軍の一言で美波は一瞬口ごもる

重苦しい空気の中、美波は口を開いた

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だし……。けど、一応秘密の話だからね？」

「口外するつもりはない。遠慮なく話してくれ」

「実は瑞希なんだけど……あの子、転校するかもしれないの」

「なにっ!？」

予想の範囲を越えた話に3人は驚く

普通ならこういう話は教師から話される物なんだが、瑞希が教師にも話してない事を考えると余程深刻な事態に陥っていると言えよう

「む。マズイ。明久が処理落ちしかけてるぞ」

「このバカ!不測の事態に弱いんだから!」

「そんな話を唐突にされたら誰だってパニックるわ!しっかりしろ明久!お前はまだ生きている!」

白目の明久を揺さぶり、なんとか正気に戻らせた

「やあ將軍……、モヒカンになった僕でも、味方になってくれるかい……………」

「……………どういう処理をしたら、瑞希の転校からこういつ反応が得られるのかしら」

「ある意味、稀有な才能かもしれんのだ」

「落ち着け。なってやるから落ち着け」

どうやらまだ正気には戻りきれてないようだ

「美波！姫路さんが転校って、どういふ事さ！」

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと……………」

「恐らくFクラスの環境が原因だろうな。本来姫路は俺と同じように高いレベルにいる筈の人間。それがみかん箱と言う設備とバカだらけのクラスで勉強してるなんて、普通の親なら転校させようと考えてもおかしくない」

「それに瑞希は、身体も弱いから……………」

「そうだよな。それが一番マズイよね……………」

衛生的に劣悪な教室では瑞希じゃなくても体調を壊しかねない

だから喫茶店を成功させて設備を向上させたいのが美波の考えなのだ

「…………アキはその…………瑞希が転校したりとか、嫌だよな…………？」

「もちろん嫌に決まってる！姫路さんに限らず、それが美波や秀吉、將軍であつても！」

明久の言葉に美波が嬉しそうに頷き、將軍は頬を掻きながらほくそえむ

ちなみに本心は、雄二だったらどうでも良いらしい

「そういう事なら、何としても雄二を焚き付けてやるさ!」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「俺も協力するぜ」

秀吉と将軍も参戦したところで明久は携帯を取り出し、雄二の携帯に電話をかける

「あ、雄二。ちょっと話が  
!?!もしもし!もしもーし!」

え?雄二。今何してるの?雄二

明久が携帯をしまう

「どうした？なんて言ってたんだ？」

「えっと、『見つかった』とか『鞆を頼む』とか言ってた」

「……………？その様子からして、誰かに追われてるみたいだな」

「大方、霧島翔子から逃げ回っているのじゃろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからの」

「自分が負けたせいで霧島と付き合う事になったつうのに、逃げ回るとは流石ゴリラの思考だな」

毒を吐く將軍を他所に明久は教室を出ようとする

「おい、連絡が取れないんじゃないか？」

「相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない。秀吉、お願い

い出来るかな？」

「うむ。任せておくのじゃ」

「いつまで教室で待たなきゃなんねえんだ？」

「そんなの分からない  
つと待って。今替わるから」

あつ、電話。もしもし？坂本？ちよ

将軍が？マークを頭に浮かべる中、美波が秀吉に携帯を渡す

「……………雄二。今どこ」

プツツと電話が切れる音

なんと今のは学年首席 霧島翔子の声

これぞ演劇部のホープと言われる秀吉の特技、声帯模写である

「す、すげえ！今の完全に霧島の声だったぞ！？他にも出来るのか！？」

「当然だ（将軍の声）」

「おおっ、俺の声まで！……明久が絶対に言わない様な台詞とかも言えるか？」

「うむ。では 勉強って楽しいよね！（明久の声）」

「ぶっはっはっはあ！コレすげえ！」

秀吉の声帯模写の威力は将軍のツボに入ったようだ

学園長はお偉いさん

の答(前書き)

更新がかなり遅れてしまい申し訳なく思っています。色々と長考したもので……

学園長はお偉いさん      の筆

「そうか。姫路の転校か……」

場所はFクラス

明久は雄二を連れて美波、秀吉、将軍の3人と合流していた

「そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「不十分？どうして？」

「よく考えてみる明久。ござとみかん箱つつう貧相な設備は、普通に考えて快適な学習環境とは言えない」

「将軍の言う通りだが、これは喫茶店が成功したら利益で何とかなる」

「だったら問題は無いんじゃない？」

「まだある、この老朽化した教室自体だ。こいつをどうにかしよう

と言つたら学校側の協力が不可欠だ」

「確かにな。業者に頼むしか無いし、それなりに手続きや金が掛かる」

將軍と雄二は淡々と姫路が転校を勧められた理由を説明する

設備は喫茶店の利益で改善出来るが教室はそうはいかない

「そして、レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促す事の出来ない学習環境という面だ」

「これに関しては誰も否定出来ないな。何せ姫路や今ここにいるメンバー以外の人間はバカの塊だ」

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は難しいの」

「そうでもねーよ？島田が姫路と共に召喚大会で優勝したらFクラスにも学年トップと渡り合える生徒がいるって証明できるんだ。それに喫茶店の宣伝にもなるから設備もどうにか出来る。そうだろ？」

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。どうしても転校したくないから協力して下さいって。召喚大会なんて見世物にされるだけみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

いつもと違う優しい表情の美波に明久は一瞬目を奪われる

瑞希と美波が召喚大会で優勝すれば大団円なのだが、将軍は万が一の事を考える

「バックアップ代わりに言っちゃ何だが、俺と明久も参加しよう」

「え？僕も？」

「一応だ。仮に姫路と島田が負けてしまっても俺達が優勝したら結果は同じだが効果は段違い、2つの方法で何倍も特になる」

「なるほど……うん、将軍が味方になってくれるなら百人どころか  
一万人力だよ」

将軍と明久も参戦を決意した事により、一つ目と二つ目の問題は解  
決出来そうだが………

「それはそうと、二つ目の問題はどつするの？」

「どつするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

当然と言わんばかりの態度に将軍の目は見開く

「お前なかなか勇氣ある行動を提案するな………学園の最高責任者  
に直訴って、ヤクザに殴り込みかける様なモンだぞ？」

「平然と斧やら刀やらを人に向ける殺人鬼に言われたくねえ」

それはもつともである

「でも雄二、僕らが学園長に言っただくらいで何とかしてくれるかな？」

「あのな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？いくら方針とは言え、生徒の健康を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

「それを言われたら流石に学園長もOKしてくれるかもしれないよ。よし。俺、明久、雄二、秀吉で学園長室に行こう。島田は学園祭の準備計画をしておいてくれ」

「何故ワシもなのじゃ？」

「俺と明久は学園の問題児とも言える観察処分者だ。そんな奴らが動物園を脱走したゴリラと共に学園長室に乗り込んでみる。クーデターと間違えられちまう」

「おい將軍、ちょっとツラ貸せやコラ」

挑発的な言い分ではあるが否めない

將軍は転校生であっても既に学園中に危険度が認知されている

中には『將軍は織田信長の生まれ変わり』と呟く者も

「俺はそんなに酷い奴に見えるのか？」

「そんな事……無い と思うよ？」

「何で今二回も間を空けた？」

ちよつと悲しい事實に將軍は涙を流しそうになるが、そんな暇は無いと言わんばかりに学園長室を直指して教室を後にした

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月グランドパークに……』

新校舎の一角にある学園長室前までやって来た將軍一行

中では何やら言い争ってる声が聞こえてくる

「どうした、明久」

「いや、中で何か話をしているみたいなんですけど」

「うむ。言い争ってる様に聞こえるのう」

中に学園長がいる事は確かなのだが、とても穏やかな様子ではない

しかし、今は教室の問題を解決するのが最優先

「無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

「それもそうだな。待ってる暇はこっちは無い訳だし」

「失礼しまーす！」

「ワシがついてきた意味は無いのではないか……？」

さっきまで学園長室に乗り込む事はヤクザに殴り込みかける様なモノと言っていた將軍も、明久と雄二に続いて学園長室にズカズカと入った

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

室内にいたのは長い白髪が特徴で、試験召喚システム開発の中心人物でもある藤堂カヲル学園長

第一声からガキども言ってる事から、相当規格外な人間らしい

「やれやれ。取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これでは話を続ける事も出来ません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

眼鏡を弄りながら学園長を睨み付けたのは鋭い目付きとクールな態度で一部の女子生徒に人気が高い竹原教頭だ

教育現場に似つかわしくない単語のオンパレード

学園の経営について話し合っているのだろうか

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があると言う訳でもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「それでは、この場は失礼させていただきます」

学園長室を出る際、一瞬部屋の隅に視線を送ったのを將軍は疑問に思いながらも見逃さなかった

「今日は学園長にお話があつて来ました」

「アタシは今それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな」

こんな横柄な婆さんに礼儀を説かれるなんて世も末だ。と心の中で思う將軍と明久だった

「失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二」

「同じくF組の木下秀吉と申す」

「それでこっちが 二年生を代表するバカ二人でグハツ」

人をコケにするような紹介に腹を立てた將軍は、雄二の頬にエルボ  
ーを入れた

「普通に名前を言えばボケが」

「ほう……そうかい。アンタ達がFクラスの坂本と吉井、そして木下と将軍かい」

「ちょっと待って学園長！僕達はまだ名前を言ってますよね!？」

「気が変わったよ。話を聞いてやるつもりじゃないか」

「俺や明久の話は聞かないのか」

明久の言い分と将軍のツッコミを無視して口の端を吊り上げる学園長

こんなババアでも一応学園の最高責任者である

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノ口」

「分かりました」

口汚く罵倒されているにもかかわらず、雄二は落ち着いた態度と行動を保って話を進める

「Fクラスの設備について改善を要求しに来ました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

この時点で既に將軍は懷に手を入れる準備をしているのに大した奴だと感心してしまう面々

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みその様に穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

『あ、言動が綻び始めた』

「学園長の様に戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今

の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

『戦国時代から生きているなら齡500年だぞ。流石に人として死んでるだろ』

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、と言っ訳です」

ようやく雄二の話が終わったが、学園長は思案顔になって黙り込む

これだけ無礼な説明の仕方に腹を立ててもおかしくはない

「あの、学園長……？」

「今の無礼に怒ったならば謝罪致す。じゃから、どうか話だけでも聞いて」

「……ふむ、丁度いいタイミングさね……」

一瞬小声で何かを呟いた学園長は、將軍達の方に顔を向き直す

「よしよし。お前達の言いたい事はよく分かった」

「え？それじゃ、直してもらえるんですね！」

「却下だね」

教室改善の話はバツサリと断られた

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「待て明久。こんなシワクチャの老婆を捨てたら環境破壊が促進されちまう。ここは燃やして灰にして枯れ木にばら蒔いて花を咲かせた方が世の為だ」

「明久に將軍、お前らもう少し態度には気を遣え」

「……お主が言えた台詞ではないぞい」

次々と本音が漏れ出す3人に対して突っ込む秀吉

將軍は学園長に頭を下げて学費の支払いを延期してもらったのだが、もつここまで言われたら我慢など出来る筈もない

「全く、このバカ共が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えて下さい、ババア」

「正当な理由を聞かずに引き下がれませんよ、クソ妖怪ババア」

「……………お前達、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

「……………申し訳ない」

笑顔でババア呼ばわりしてる3人の横で頭を下げる秀吉

ババア

もとい、学園長が呆れ顔で將軍達を見る

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」

「ちっ、確かにそれはもつともだが、このままだと虚弱な生徒が倒れて」

「と、いつもなら言っているんだけどね。可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなり、相談に乗ってやるつもりじゃないか」

学園長が交換条件の案を提示してきた

ただで話を聞くつもりは無い様だが、今の明久達にとっては棚からぼた餅の話だ

しかし、雄二は何の反応もせずに口元に手を当てて何かを考えている

「その条件って何ですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ。俺と明久で出場しようと思ってたところですよ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「え？優勝賞品？」

「学校から贈られる正賞には、賞状とトロフィーと白金の腕輪、副賞には如月グランドパーク プレオーブンプレミアムチケット。あと準優勝者には黒金の腕輪が用意してあるのさ」

文月学園は特異な学園方針と試験召喚システムにより多くの企業から注目を浴びている

如月グループもその内の一つであろう

因みに隣では雄二がペアチケットと言う言葉を聞いてピクツと反応していた

「はあ……。それと交換条件に何の関係が」

「話は最後まで聞きな、慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

「はい、知りません」

「堂々と答えるものではないぞい……………」

「優勝賞品のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

「回収？それなら、賞品に出さなきゃ良いじゃないんすか？」

「そう出来るならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った契約だ。今更覆す訳にはいかないんだよ」

「「契約する前に気付いてくださいよ。学園長なんだから」」

將軍と明久のツッコミが見事に八モる

「うるさいガキどもだね。腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「それで、悪い噂と言つのはどのような物なのじゃ？」

つまらない内容である事を前置きして学園長が口を開く

「如月グループは如月グランドパークに一つのジnkクスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジnkクスをね」

「??そのどこが悪い噂なんです?良い話じゃないですか」

「そのジnkクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、何だと!？」

突然雄二が大声を上げた

將軍は隣に位置していた為、鼓膜に微量のダメージ

「どうしたのさ雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まっているだろ！今ババアが言った事は、『プレオーブンプレミアムチケットでやって来たカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』って事だぞ！？」

「別に言い直さなくとも分かっておるぞ？」

「なるほど。そのカップルを出す候補に、この文月学園を選んだって訳か」

耳を擦りながら將軍は如月グループの目論見を把握した

「くそつ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな。学生から結婚までいけばジंकラスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然って事か」

「それにそのジnkクスが巷に広まれば、如月グランドパークは大勢の客を引き付けられるし企業利益もアップする。まさに一石二鳥だ」

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか。それと將軍って言ったかい？アンタも編入試験トッブは伊達じゃないね」

学園の最高責任者だけあって彼らの事はそれなりに知っているようだ

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪い事でもないし、第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

「……………絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる……………。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚……………。俺の、将来は……………！」

「いったいどうしたと言っのじゃ？」

「霧島に『チケットを手に入れたら一緒に行つてやる』って安請け

合いでもしたんじゃないの？約束を破ったら結婚してもらつとか言われて。もしそうならただのバカだな」

からかう様に言った將軍を雄二はゆっくりと向いて睨み付ける

「……………テ・メ・エ・ガ・シ・ク・ン・ダ・ノ・カ？」

「当たってんのかよ」

凶星だった事に將軍は苦笑い

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

「つまり交換条件ってのは

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それが出来るなら、教室の改修くらいしてやるんじゃないか」

つまり優勝賞品さえ手に入れば良いと考えた明久と將軍は、互いにアイコンタクトで優勝賞品の強奪を計画しようとしたが

「無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ」

先読みされ阻止された事により強奪作戦はなしとなった

「……僕達が優勝したら、教室の改修と設備の工場を約束してくれるんですね？」

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ。ただし、清涼祭で得た利益で何とかしようって言うなら話は別だよ。特別に今回だけは目を瞑ってやっても良い」

本来なら自分達でお金を出して設備を変える事すら許されないのだが、取引に応じている為許可してくれた

「うむ。喫茶店をしながら大会で優勝しなければならないとは結構キツいのう」

「確かにキツいと言っちゃキツいが、取引に応じなければ教室の改修は白紙になっちゃう。話を聞いてくれただけでもラッキーなんだからよ」

「それじゃ交渉成立だね」

「ただし、こちらからも提案がある」

話がまとまり、教室に戻ろうとした寸前で雄二は学園長に話しかけた

「なんだい？言ってみな」

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は化学と言った具合に進めていくと聞いています」

学園の宣伝行事であるから、なるべく派手にした方が効果がある

試合毎に科目を変更するのは試合や来賓を白けさせない為であろう

「それがどうかしたかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

「ふむ……。良いだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「……ありがとうございます」

雄二の目付きが鋭くなった事に明久と將軍は少し気になったが

「で、ペアはどうする？俺と明久が組めば良いのか？」

將軍が召喚大会のペア決めと言う話題に変更してきた

「いや、秀吉は前回の試召戦争では指揮や裏方しかやっていないし、俺は一度も召喚した事がない。付き合いの長さから考えて、俺が明久と組む方がベストだ」

「となると、ワシは將軍とペアになるのじゃな」

すんなりと自動でペアが決まった

「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝出来るんだろっね？」

「無論だ。俺達を誰だと思っている？」

「今の俺達には負ける気がしねえよ」

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

「ワシも全力を尽くそう」

「それじゃ、ボウズ共。任せたよ」

「」「」「おっよっ！」「」「」

「承知した！」

こうして、明久&amp;雄二の『文月学園最低コンビ』

將軍&amp;秀吉の『狂乱武將に捕らわれた美少女コンビ』が誕生する事になった

清涼祭スタート！（前書き）

更新速度が遅れている事に関して謝罪致します。

## 清涼祭スタート!

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

「?可愛らしさ ? 統率力 ? 行動力 ? その他」  
また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

「?可愛らしさ 候補……姫路瑞希& a m p・島田美波」

教師のコメント

甲乙つけがたいと言ったところでしょうかね。

吉井明久の答え

「?可愛らしさ 候補……姫路瑞希 (訂正) 木下秀吉 (訂正)  
島田美波」

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるどころです。

将軍の答え

「?可愛らしさ 候補……木下秀吉 (訂正) 姫路瑞希? & a m p ;  
島田美波?」

教師のコメント

何回も書き直した跡がある上に、何故?マークを付けるのですか。

坂本雄二の答え

「?その他(結婚相手) 候補……霧島翔子」

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

清涼祭初日の朝

Fクラスの教室はいつもの小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店

に姿を変えていた

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

「ああ、流石は演劇部だ」

「ま、見かけはそれなりの物になったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

教室内の至る所に設置されているテーブルの正体はみかん箱

積み重ねてテーブルクロスをかける事で立派なテーブルへと変身を遂げたのだ

その内の一つのクロスを捲る秀吉

そこには汚いみかん箱が顔を出した

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

「きつと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとし

ても見なかった事にしてくれと思うよ」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールする様な人は来ませんよ、きっと」

「そうだな。そんな事する奴がいるとしたら営業妨害が目的としか思えねえ。もし仮にやってきたら、俺がここに転校してくる前に知り合った便利な後輩達を呼んで、そいつらを人気の無い場所に埋めてもらっ」

「ダメだ將軍！僕は友人から犯罪者を出したくない！」

危険な武器を携帯している時点で危ぶまれるのだが、そこはスルーした

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

「おうムツツリーニ。厨房の方はOKか？」

「……………味見用」

ムツツリーニが木のお盆を差し出した

その上にはティーセットと胡麻団子

「わぁ……。美味しそう……」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

そう言って3人は作りたての胡麻団子を勢い良く頬張る

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘過ぎないとこるも良いのう」

「やっぱり女の子。甘い物が好きなんだなあ、3人とも」

明久の言葉に一ヶ所おかしな点があったが、將軍は気にする事なく頷く

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当ね……」

胡麻団子の美味しさに2人はトリップ状態となった

「それじゃ、僕も貰おうかな」

明久が残った胡麻団子を手に取り一口

「ふむふむ。表面はゴリゴリで中はネバネバ。甘過ぎず辛過ぎる味わいがとってもンゴパっ！」

口から有り得ない音を発して豪快に倒れた

「あ、それは姫路が作ったものじゃな」

「秀吉！見たなら最初に言っとけよ！明久の口から変な色の泡が吹き出してんじゃないか！」

急いで將軍が救命措置（と言う名のギロチンドロップ）を施し、明久は三途の川から無事に生還

「おい姫路、この胡麻団子なんだが……いったい味付けには何を入れた？」

怒りを孕んだ視線で瑞希に殺人胡麻団子の詳細を聞く將軍

彼は一人暮らしの為か料理はシェフ並みの実力を持っている

それ故に料理には少し煩い

「別に変な物を入れてませんよ？隠し味に硫酸を入れただけです」

硫酸……無機酸の一つ。金・白金以外の多くの金属を溶かす

將軍は臆面もなく危険薬品混入発言をした瑞希に絶句

「姫路、料理に薬品は使わんぞ」

「えっ？將軍君は使わないんですかっ？」

「俺だけじゃなく全ての料理人が薬品なんぞ使わんわ！」

「將軍落ち着いて！懐から何かを取り出そうとしてる手を引っ込めるんだ！」

あまりのイライラに將軍は自作武器を取り出そうとした

危険を察知した明久は將軍の手を掴んで制止させる

「うーっす。戻ってきたぞーって、何やってんだお前ら？」

そこへ雄二が戻ってきた

「あ、雄二。おかえり。今ちよつと将軍が暴走しかけて」

「ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

雄二は躊躇いなく”明久の食べかけ”の胡麻団子を口に運んだ

「……たいした男じゃ」

「雄二。君は今、最高に輝いてるよ」

「お前の勇猛さに敬礼……」

「？お前らが何を言っているのか分からんが……。ふむふむ。表面はゴリゴリで中はネバナバ。甘過ぎず辛すぎる味わいがとってモンゴパっ！」

デジャブ発生

「明久、今度姫路に料理のイロハを叩き込んだ方が良いと思うが」

「これ以上変な方向に進まないか心配だけどお願いするよ。刹那と

なっちゃんにも援護を頼んでおいた方が良いかな……?」

將軍と明久が小声で瑞希のバイオ兵器改善計画を立てていると……

……

「ふっ。何の問題も無い。あの川を渡ればいいんだろう?」

「ゆ、雄二!その川はダメだ!渡ったら戻れなくなっちゃう!」

「つうか今の一口で致命傷にまで至るのか!?」

雄二は三途の川を渡りかけていた

明久は急いで心臓マッサージを施す

「六万だと?バカを言え。普通渡し賃は六文と相場が決まっ  
はっ!?!?」

何とか蘇生に成功した

これ以上めんどくさい事態に巻き込まれるのは嫌だと將軍は話を逸

らす

「ところで、今まで何していたんだ？」

「あ……ああ、ちょっと話し合いにな

本当は学園長室に行って試験科目の指定をしてきたんだが、バレると厄介なので適当に誤魔化す雄二

「そうですか。それはお疲れ様でした」

「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

「バッチリじゃ」

「……………お茶と飲茶も大丈夫」

『姫路<sup>きん</sup>作のバイオ兵器が混ざっていなければ完璧だろうな』と心の中で呟く將軍と明久

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉と將軍、ムツツリー二に任せる。

俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「あれ？アンタ達も召喚大会に出るの？」

「え？あ、うん。色々あってね」

「俺と秀吉も出るぞ？まあ一回戦は俺達の方が後だけど  
將軍と明久は言葉を濁すように返答

学園長から『チケットの裏事情については誰にも話すな』と口止め  
されてる故に下手な事は言えない

「え？吉井君と坂本君がペアなんですか？」

「ああ。前回の試験召喚戦争じゃ雄二と秀吉は殆ど召喚してないか  
ら、俺達はフォロワー役」

「もしかして、賞品が目的とか……………？」

「うん。一応そついう事になるかな」

正確には賞品と設備の交換である

優勝賞品の白金の腕輪は召喚獣を2体同時に喚び出す「同時召喚型」、立会人になれる「代理召喚型」がある

準優勝賞品の黒金の腕輪には白金の腕輪と同じ「代理召喚型」、そして消費した点数によって武器を変えられる「装備変更型」の腕輪が贈呈される

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？な、何で目が攻撃色に!？」

「吉井君。私も知りたいです。誰と行くことと想っていたんですか？」

美波だけでなく、いつの間にか瑞希まで戦闘モードに入っていた

おそらく2人が言ってるのはペアチケットの事だ

「だ、誰と行くつもりって……（何とかして將軍!）」

明久は2人には見えないよう指で將軍に助けを求める

將軍は何とかしてやるうと頭を回転させる

すると、ものの数秒で良いアイデアが浮かんだ

「勘違いするな姫路に島田。俺達のどちらかが優勝してもペアチケットはある人に売るつもりだ」

「ある人って誰よ？」

「霧島翔子」

將軍の一言で雄二はこの世が終わるみたいな形相となった

「ちょっと、待て將軍！何を言っただげッ！」

「ペアチケットは霧島に売るんだよな明久」

「え？……あ、うん、そっだよ。僕だとそっいう相手はいないし、持っても意味が無いからさ。霧島さんにあげるんだ」

雄二の口を掴んで黙らせた將軍はすかさず明久にペアチケット売買の話を持ち、明久もその話題に合わせる

因みに瑞希と美波は、明久が如月グランドパークに行く気が無い事を聞いて安心しつつも落胆

話が終わったところで雄二は將軍の握力から逃げ出した

「おいコラ將軍！テメエ俺の人生を何だと思つてやがるっ!？」

「はっ？お前の人生って何か貴重なモンなの？」

「あ、そろそろ一回戦が始まっちゃう。ほら行くよ雄二」

「く、くそっ！覚えてろ！いつか殺してやる！」

小悪党みたいな台詞を吐き捨て、明久と雄二は試合会場に向かっていった

「って、よく考えたら俺達もすぐ試合だったな」

「そっじゃのづ。ワシらも出るとしよづか」

試合会場に行く為、教室を出ようとしたが後ろから襟首を掴まれてしまっ

「あのっ、何すか？」

「ねえ、さっきペアチケットを売るって話したわよね？」

「いくらで譲ってくださいますか？」

優しい口調ではあるが、瑞希と美波の目には尋常じゃない何かが宿っていた

その気迫に將軍のコメカミから一筋の汗が垂れる

「ま、まあ俺達が優勝しないとチケットの売買は出来ないから、なるべく考えておく」

「本当？絶対よ？」

「約束してくださいね？」

將軍はコクコクと頷いてから秀吉と共に教室を抜け出した

『危ない奴は俺だけじゃないのか……………』

將軍は親近感に近い何かと複雑な気分を感じさせられた

清涼祭スタート！（後書き）

なるべく更新を早める様努力しますので応援お願い致します。

営業妨害する奴に容赦はするな！（前書き）

更新速度を早める様にすると言ったのにこの有り様………ホントに  
申し訳ありません

営業妨害する奴に容赦はするな！

校庭に作られた特設ステージ

ここで召喚大会一回戦が行われる

明久と雄二はDブロック、將軍と秀吉はBブロックで試合を進めていく

一応この二組が決勝で当たる様に学園長が配慮したのだ

「三回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください」

一回戦の科目は数学

將軍はAクラスレベルの学力を持っているので余裕が混じった表情をしていた

「秀吉。一回戦は練習みたいなモンだから先に戦死しても気に病むなよ」

「分かっておるが、ワシの点数じゃとあまり力になれんかもしれぬ」  
少々自信無さげな秀吉と正反対の將軍の前に対戦相手のチームがやってくる

「あれ？アンタらはBクラスの……確か岩下と菊入だったっけ？」

「良かった……名前覚えられてる……」

意中の相手が名前を呼んでくれた事により岩下と菊入は顔をトマトみたいに真っ赤にした

「が、頑張ろっね律子」

「うんっ」

「相手がBクラスとなると厳しいのっ」

「実際は向こうも秀吉と同じように操作慣れしていない。条件だけで言っならこっちが有利だ」

観察処分者の将軍は明久と同じく召喚獣の操作には慣れている

殆どが実戦で培われたが、観察処分者にのみ課せられる雑用もこなしているからである

「では、召喚してください」

「サモンっ！」

Bクラス 岩下律子 & amp ; 菊入真由美

数学 179点 & amp ; 163点

岩下と菊入は前にも見たハンマーと金属棒を装備した召喚獣を喚び出した

「じゃあ俺達も、サモン！」

「うむ、サモン！」

現れた將軍と秀吉の召喚獣

漆黒の鎧に身を包み、ノコギリ刃の剣と2本の銃剣を持つ將軍の召喚獣

薙刀に袴と言った古風な装備をした秀吉の召喚獣が対戦相手に向かって構えの姿勢を取る

Fクラス 將軍& amp; 木下秀吉

数学 368点& amp; 76点

「あいつ、將軍君！」

「ん？何だ？」

「私達、まだ諦めてません。だからこの試合に勝ったら……どっちか選んでくれませんか？」

「アンタらもなかなか粘りますねえ……まあ、俺に勝てたらの話だな」

將軍は2人の気迫に押し負けたのか、渋る様に交際約束を了承

岩下と菊入はより一層気合いが入る

「明久もそうじゃが、お主も大変じゃのう」

「のんびりお喋りしてる暇は無いぜ？来るぞ」

前を向いてみると、敵召喚獣が武器を振り下ろしてきた

將軍は左に、秀吉は右に召喚獣を横っ飛びさせて攻撃を回避

そこから岩下は將軍の、菊入は秀吉の召喚獣を追い掛ける様に跳ぶ

「えいつ！やあつ！」

「むっ！はあつ！」

菊入の召喚獣の攻撃を回避しながら秀吉の召喚獣が攻撃をくらわせ

ていく

動作は双方共にぎこちないが、まあまあだなど將軍は内心評価する

「えいつ！えいつ！」

「そんな大振りの攻撃、目を閉じてでも避けられるぜ」

岩下の召喚獣のハンマーを素早い動きでかわし、アクロバットな動作も披露する將軍

鎧を装着しているにも係わらず軽快にジャンプ

時には捻り回転も加えたりと大技を繰り出すが……

「あっ」

「えっ？」

ポヨヨンッ

將軍の召喚獣が岩下本人の胸にしがみつく様な形で着地

更に観察処分者設定な為、その感触は本人にも伝わってしまった

「……………！（汗だく）」

「だ、ダメーっ！！」

「（バチンッ！）平手いつ！」

余程恥ずかしかったのか、岩下は將軍の召喚獣に力一杯ビンタ

観察処分者特有の物理干渉能力はポヨヨンの感触だけでなく痛みもフィードバックされる

將軍の頬にもその衝撃と痛みが走り、勢い余って顔面から地面に倒れてしまった

「痛い……………！フィードバックも地面も痛い……………！」

「お主は何をやっておるのじゃ……」

「直接叩いちゃダメよ律子！」

「ごめん真由美！でも、おっぱい触られちゃった……」

召喚獣ごしとは言え女性の胸を触ってしまった將軍は立ち上がって  
即土下座に移行

何とか許してもらい試合を続行させる

「ある程度の痛みが反映されるのは聞いていたが、まさかここまで  
痛いとは……悪いが速攻で決めさせてもらう！」

高得点を活かしたスピードで相手を翻弄しながら接近し、敵召喚獣  
の身体を剣で貫く

その直後に背中に背負った銃剣を一本、菊入の召喚獣に投擲

隙が出来た事で秀吉の薙刀が相手を切り裂いた

「勝者、將軍・木下ペア」

立会人の教師が勝者の名前を告げ、一回戦は無事終了（將軍以外）

「「また負けちゃった……」」

「これも一応勝負なんだな。すまない」

「結局最後は助けられてしまったのう」

「これからだよこれから。早いトコ教室に戻るぞ」

「まったく、責任者はいないのか！このクラスの代表ゴペツ！」

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でも御座いましたか？」

教室に入るや否や、雄二が客の一人らしき坊主を殴り飛ばしている

のが將軍達の目に入った

明久達の相手はEクラスのペアで、危なげ無く勝利したから先に教室に帰還していた

將軍は現状を知りたいが為、明久から話を聞き出す

話によるとクロスで覆い隠したみかん箱が気に入らなかったらしく、態々それを剥がして文句を言っていた

確かに食べ物扱う店に相応しくないと云う事は理解できる

だが、あれは明らかに営業妨害が目的としか言えない

「しかも3年かよ。俺達生徒の中じゃ一番大人のくせに」

「まずいのう。この悪評は経営に響くぞい」

「あ、秀吉。丁度良かった、雄二から伝言なんだけど」

明久から雄二の伝言を聞かされた秀吉は教室内のクラスメイト数名

に声をかけて教室を出た

その最中、雄二は『キックでつなぐ交渉術』でもう一人の男、ソフトモヒカンを蹴飛ばしていた

その前が『パンチから始まる交渉術』らしい

「しかし、クレーム処理の仕方になってねえな雄二は」

「いや、あれでも充分だと思っけど」

俺が手本を見せてやる、と將軍は雄二の所へ歩み寄る

「代表。この場は交渉人の私、ネゴシエーター・將軍にお任せを」

「そうか。なら任せよう」

そう言つて雄二は一步下がり、將軍はまず丁寧にお辞儀

「只今より代表に代わりまして、ネゴシエーター・將軍が交渉を務めさせていただきます」

「いてて……ほう、少しは話を通じる奴が出てきたか。そのクズ代表に代わってこの始末をつけゴピヤアッ！」

相手が変わった事で強気になった坊主は將軍の飛び膝蹴りで吹っ飛ばされた

「おい！お前も話を聞く前に相手を殴ったり蹴ったりするのか！？交渉はどうしたあ！？」

「いえいえ、今のは代表と同じ様に私がモットーとしている『飛び膝蹴りから始まる交渉術』にございます」

將軍の交渉術は雄二よりもアグレッシブだった

「ふざけんな！これのどこが交渉術グベアッ！」

「そしてこちらが『掌底でつなげる交渉術』です。最後は『代表とのツープラトン技でお帰り願う交渉術』が控えています、どうぞさねます？」

「わ、分かった！こちらは夏川を交渉に出そう！俺は何もしないか

ら交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちょっと待てや常村！お前俺を売ろうと言っのか！？」

坊主は夏川、モヒカンが常村と名前が判明

明久は言いにくいから夏坊主、常モヒカン

雄二はまとめて常夏コンビと命名した

「それで坊主川とモヒ村。まだ交渉を続けるか？（雄二にアイコンタクト）」

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらおう」

將軍の殺気に気圧されたモヒ村（笑）は撤退準備

因みに將軍が命名した坊主川とモヒ村の名前に明久は必死に笑いを堪えている

「そっか。それなら」

小さく頷いた直後、雄二が坊主川（笑）の腰を抱え込み、将軍が懐から特殊カーボン製のナツクルを装備して拳をモヒ村（笑）に向ける

「おい！俺もつ何もしてないよな！？どうしてそんな大技をげぶるあつ！」

「俺達退散するって言ったぞ！？何でそんな武器をほべばあつ！」

「」  
「これにて交渉は終了だ」

バックドロップを決めた雄二が平然と立ち上がり、昇龍拳を決めた将軍がナツクルをしまう

『あの2人が組んだらとてつもなく恐ろしいコンビになる……………』  
と、明久は恐怖を感じざるを得なかった

「お、覚えてるよっ！」

モヒ村が倒れた坊主川を抱えて走り去っていき、一つの問題は片付いたのだが……………

「流石にこれじゃ、食っていく気はしないな」

「折角美味しそうだったんだけどね」

「食ったら腹壊しそうだからなあ」

もう一つの問題が発生

クロスの中のみかん箱を目の当たりにし、一人目が席を立つ

『ん？竹原教頭？』

將軍は竹原教頭の姿に疑問心を抱くも、今は余計な事を考えている場合ではない

一人目が立つと次々と客が席を立ってしまふ

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたの  
で、暫定的にこのような物を使ってしまいました。ですが、たった  
今本物のテーブルが届きましたのでご安心下さい」

客に頭を下げる雄二の後ろ、秀吉とクラスメイト数名がテーブルを運んできた

演劇部で使っている大道具のテーブルなので風評対策としては良しだ

「あれ？テーブルを入れ替えてるの？」

「あ、おかえり。美波に姫路さん。一回戦はどうだった？」

「はいっ。なんとか勝てました」

笑顔でVサインをする瑞希

これで試合の方は心配ない

「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせていただきますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりとおくつろぎ下さい」

締め言葉を残して雄二は明久達のいる廊下に出た

「雄二、どうなってやがんだ？たかが学園祭の喫茶店で営業妨害されるのはおかしいだろ」

「確かにそうだが、今は他のテーブルを手に入れる事が先決だ」

「何か死んでもあるの？」

雄二は口の端を吊り上げて悪役顔負けの笑みを浮かべ、明久と共にテーブル調達に向かった

ヴィーっ！ヴィーっ！

突然將軍の携帯が鳴った

開いて相手が誰なのか確認すると『非通知設定』と表示されていた

ピッー

「もしもし？……っ！？」

「どづしたのじゃ將軍？顔色が悪いぞ？」

「んにやつ、何でもない。ちょっと古い友人からの電話だからビツクリしただけだ。ここだと邪魔になりそうだから向こうで話してくる」

最初は噛んでしまったが何とか平静を取り繕い、將軍は邪魔されないようトイレに向かう

「何故この携帯の番号を知っている？番号は変えた筈だぞ……！！  
？何の用だ？           ふざけんな！お前らとはもう縁を切ったんだ  
！何を今更……っ！？今何処にいるんだ……！！？           分か  
った。だが時間をくれ。学園祭が終わった後で必ず電話する。それ  
までここや俺の知人には手を出すな……！！」

將軍は乱暴に携帯電話を切り、トイレのドアを拳で叩いた

「過去からは逃げられないのか……っ！」

営業妨害する奴に容赦はするな！（後書き）

將軍の電話の相手は誰なのか……？終盤辺りで明らかになると思いますが

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4412w/>

---

バカとテストと召喚獣もう一人の観察処分者

2011年12月11日23時51分発行